JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

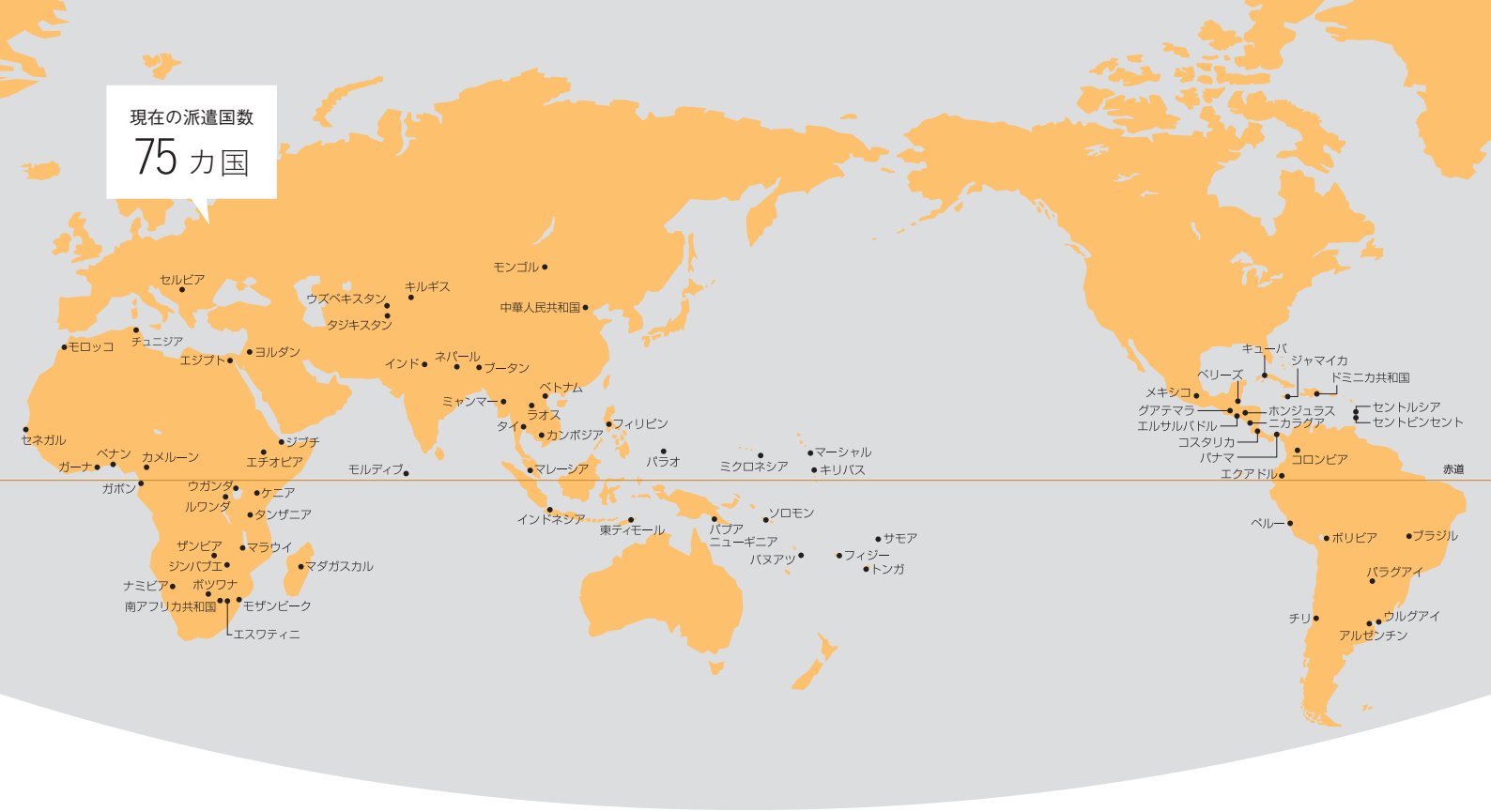
7

2020 JULY

特集

協力隊後の生き方
～地域づくりの仕事～

派遣国の横顔
～タンザニア～



JICA海外協力隊 派遣現況

（2020年5月末現在、単位：人）

※新型コロナウイルスの感染拡大により、派遣中隊員は全員一時帰国中です。

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	45	2
エスワティニ	1	
エチオピア	16	
ガーナ	52	
ガボン	14	3
カメルーン	26	2
ケニア	35	3
ザンビア	49	5
ジブチ	13	
ジンバブエ	8	
セネガル	37	1
タンザニア	56	2
ナミビア	11	
ベナン	35	
ボツワナ	16	
マダガスカル	29	
マラウイ	28	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	29	1
ルワンダ	36	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	20	
インドネシア	12	1
ウズベキスタン	19	5
カンボジア	18	2
キルギス	28	1
タイ	19	4
タジキスタン		2
中華人民共和国	11	
ネパール	32	4
東ティモール	34	
フィリピン	25	2
ブータン	15	4
ベトナム	27	9
マレーシア	13	5
ミャンマー	15	
モルディブ	9	
モンゴル	35	
ラオス	36	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	2	
サモア	13	1
ソロモン	20	1
トンガ	16	
バヌアツ	23	
パプアニューギニア	20	1
パラオ	9	5
フィジー	19	3
マーシャル	7	2
ミクロネシア	14	4

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	2

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	15	1
チュニジア	6	
モロッコ	20	3
ヨルダン	38	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		13	6	5
ウルグアイ		2		
エクアドル	33	2		
エルサルバドル	13			
キューバ		1		
グアテマラ	19	1		
コスタリカ	27	5		
コロンビア	14	5		
ジャマイカ	21	2		
セントビンセント	3			
セントルシア	7			
チリ		1		
ドミニカ共和国	27		4	1
ニカラグア	2			
パナマ	15	2		
パラグアイ	30	2	6	3
ブラジル			69	12
ベリーズ	14			
ペルー	36	5		
ボリビア	32			1
ホンジュラス	22			
メキシコ	2	5		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	1,455 （621／834）	132 （99／33）	85 （33／52）	22 （9／13）	1,694 （762／932）
累計 （男性／女性）	45,776 （24,302／21,474）	6,553 （5,298／1,255）	1,542 （597／945）	547 （252／295）	54,418 （30,449／23,969）

一般＝青年海外協力隊／海外協力隊
シニア＝シニア海外協力隊
日系一般＝日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊
日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2020 JUL

Contents

4 JICA Volunteers' NEWS
▶キルギスの児童・生徒を対象にしたオンライン講座を提供（キルギス）
▶現地語で歌を届ける「世界に届け!!　Reach the world」プロジェクト発足（日本）

派遣国の横顔
～タンザニア～

6 教育
岡本翔太さん（数学教育・2017年度3次隊）

8 保健・医療
中川理恵さん（看護師・2017年度3次隊）

特集
協力隊後の生き方
～地域づくりの仕事～

10 群馬県利根郡みなかみ町 町議会議員
牧田直己さん（モンゴル・体育・2015年度2次隊）

12 鹿児島県鹿児島郡十島村 保健師
上野陽子さん（バヌアツ・看護師・2014年度4次隊）

14 島根県出雲市 人材派遣会社の日本語教師
木谷恵子さん（日系社会青年ボランティア／ブラジル・日系日本語学校教師・2014年度派遣）

16 長野県岡谷市 コミュニティカフェの経営者
吉江勇介さん（ラオス・村落開発普及員・2006年度2次隊）

18 私の引継書
今村めぐみさん（マレーシア・障害児・者支援・2017年度1次隊）

20 "失敗"から学ぶ
山崎尚子さん（ベナン・コミュニティ開発・2017年度2次隊）

22 希少職種図鑑
▶畜産・乳製品加工　中西友香さん（ブータン・2016年度1次隊）
▶再生可能・省エネルギー　吉田雪絵さん（セントビンセント・2016年度4次隊）

24 JICA Volunteer's Before ▸ After ～人生を変えた2年間～
東京消防庁の消防官　大庭良介さん（パラオ・野球・2015年度1次隊）

26 帰国後よもやま話
自動車整備隊員篇

28 Pick Up OB・OG会
▶日本も元気にする青年海外協力隊OB会
▶協力隊ケニアOB・OG会

30 JICA海外協力隊的プチテクガイド
手洗いの啓発活動／リラックスストレッチ／身近なもので理科実験

32 先輩隊員のシューカツ記
愛媛県立今治西高等学校　横山祐輔さん（サモア・体育・2014年度3次隊）

33 JOCV SPORTS NEWS

34 JICA海外協力隊のつぶやき
お題：「朝ごはん」

35 INFORMATION

36 隊員めし
目指せ！ サモア人の親友の味　マグロの「ポケ」丼

■職種別索引

職種	掲載ページ
コミュニティ開発	4、20、36
村落開発普及員	16
畜産・乳製品加工	22
自動車整備	26
再生可能・省エネルギー	23
野球	24
柔道	33
数学教育	6
体育	10、32
日系日本語学校教師	14
看護師	8、12
障害児・者支援	18

■国別索引

国	掲載ページ
キルギス	4
ケニア	28
サモア	32
セントビンセント	23
タンザニア	6、8、36
ネパール	4
バヌアツ	12
パラオ	24
バングラデシュ	33
ブータン	22
ブラジル	14
ベナン	20
マレーシア	18
モンゴル	10
ラオス	16

■出身都道府県別索引

出身都道府県	掲載ページ
福島県	23
群馬県	10
千葉県	20
神奈川県	8、24
長野県	16
岐阜県	22
島根県	14
愛媛県	32
福岡県	6、18
熊本県	33
鹿児島県	12

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：（株）AND
レイアウト：（株）AND
印刷・製本：弘報印刷（株）

Kyrgyz Japan

キルギスの児童・生徒を対象にしたオンライン講座を提供

文＝朝山琴美（あさやまことみ）さん（キルギス・コミュニティ開発・2013年度2次隊）

上：講座開始記念に保存した画像　右下：日本語講座を受講するキルギスの児童　左下：工作の講座の様子。液体の濃度の違いを利用して虹（カラフルな水の層）をつくっている
受講者向けアンケートでは、「日本人と初めて話せて嬉しかった」「日本語をもっとたくさん勉強したい」「朝の体操で早起き習慣ができた」などの感想が寄せられている

オンライン講座の内容		
講座	対象者	講師
算数	1〜6年生	遠山佳奈さん（数学教育・2018年度2次隊）
	3・4年生	城谷俊太さん（青少年活動・2018年度3次隊）
	3・4年生	荒井達記さん（小学校教育・2019年度1次隊）
	3・4年生	鈴木諒平さん（小学校教育・2019年度2次隊）
英会話	1〜5年生	臼井早紀さん（青少年活動・2018年度1次隊）
	1〜6年生	垣花拓実さん（青少年活動・2016年度1次隊）
	3〜8年生	吉本真子さん（青少年活動・2019年度1次隊）
親子体操	1〜6年生	東城澪太さん（体育・2019年度1次隊）
エクササイズ	1〜8年生	斎藤千愛さん（体育・2019年度2次隊）
折り紙・工作	1〜5年生	千葉桜子さん（美術・2016年度3次隊）
折り紙	1〜6年生	本田隆介さん（青少年活動・2018年度1次隊）
道徳	5〜11年生	
日本語	1〜8年生	

※派遣国はすべてキルギス

4月上旬、キルギスの児童・生徒を対象にオンライン講座を開始しました。キルギスの協力隊員と協力隊経験者が講師となり、さまざまなコンテンツを提供しています。キルギスの学校の休校期間中に「遊びを通して学びを提供する」というテーマで、各講師が専門性・得意分野を生かした講座づくりに奮闘しています。

私は隊員の任期満了後にキルギスへ戻り、2016年に現地で旅行会社を立ち上げました。その後、旅行業以外に輸出業やビジネスコンサルティング業など、日本とキルギスをつなげる事業も展開し、追い風が吹いていました。そんな矢先、新型コロナウイルス感染症の影響で、すべての仕事がストップしてしまいました。

キルギスで何ができることはないかと模索していたところ、同国の全学校が休校になってしまいます。家にこもってストレスを溜める子どもが大勢いるという状況を知り、オンライン講座を始めることにしました。対象は日本でいう小中高生で、講座ごとに対象学年を設定しています。

キルギスは他の開発途上国と比較してインターネット環境が良好で、一般家庭でもスマートフォン、パソコンが普及しているので、都市部だけでなく地方に住む子どもたちも受講できることが大きな利点です。

受講生と講師は、SNSを通じて募集しました。講座は、ウェブ会議システムを使用して行っています。講座のキルギス側の募集や参加者の管理は、弊社の社員が行っています。

急遽日本へ退避せざるを得ず、悔しさを抱えた現役隊員たちや、今でも派遣国に尽くしたいという隊員OB・OGたち。彼らが講師になろうと決意してくれたこと、またキルギス人と日本人が協力したからこそ実現できたプロジェクトです。

講座は、これまで150人以上が受講しました。オンラインでの難しさとして、講座の性質によっては少人数でないと円滑に進まないことが挙げられます。例えば、体操は講師が手本を見せて音楽に合わせながら真似をするので、人数制限の必要はありません。しかし、双方向で会話や発言をする算数や日本語会話講座は、人数が多いと参加者の表情や反応から理解度を測ることが困難になり、積極的に発言をする子ども以外は置いてきぼりになってしまいます。この課題は、各講座に合わせた定員を設け、キルギス側で人数を管理することで改善されていきました。

今後は、日本とキルギスの学生同士のオンライン交流や、「日本対キルギス算数バトル」を企画するなど、形を変えて遠隔講座を続けていく予定です。

オンライン講座の企画・運営をしている朝山さん。協力隊員としてキルギスの観光振興に携わり、任期満了後に起業。キルギスで暮らしている

Rwanda

現地語で歌を届ける「世界に届け！！Reach the world」プロジェクト発足

文＝粟村俊也（あわむらしゅんや）さん（ネパール・コミュニティ開発・2017年度4次隊）

ルワンダ隊員がキニアルワンダ語で歌う様子。動画では現地語と英語の歌詞が表示される。
動画は以下のYouTubeチャンネルから見ることができます。
▶https://www.youtube.com/channel/UCrBc2CuPo038jtKBIOQWx5g

投稿までの流れ	
〈4月13日〉プロジェクト発足	岡本隊員ほかコアメンバーとプロジェクト発足。仲間集め開始。
〈4月14日〉曲目決定	曲目が決定し、作品の全体像を企画・構成。
〈4月19日〉撮影開始	参加メンバーによる各言語での歌の撮影を開始。
〈4月20日〉著作権交渉難航	「上を向いて歩こう」の現地語翻訳について交渉難航。粘り強い交渉を続ける。
〈4月21日〉著作権許可下りる	「上を向いて歩こう」現地語による歌詞全訳提出を条件に使用許可が下りる。メンバー歓喜の瞬間。
〈4月22日〜5月10日〉編集	ベース音源作成、動画編集作業開始。
〈5月11日〉動画投稿	YouTubeにショートバージョンを投稿完了。引き続きロングバージョンを制作。
〈5月12日〉広報	NHKなどのメディアに取り上げられる。

世界中が新型コロナウイルス感染症の影響で苦しい状況の中、任地の方々に歌で元気を届けるため、「世界に届け!! Reach the World」プロジェクトを発足させました。21カ国76人の隊員等がそれぞれの現地語で『上を向いて歩こう』と『STAND BY ME』を歌っています。

プロジェクト発足は、ネパールでの任期を終えた帰国後の4月中旬に、同期の岡本龍太（りゅうた）隊員（タンザニア・コミュニティ開発・2017年度4次隊）とオンラインで雑談したことがきっかけでした。任地の多くは医療環境が十分に整備されていません。また、厳しいロックダウン態勢が敷かれている国もあります。我々は帰国直後で多少時間に余裕があったため「じゃあ何か任地のためにやろう」となりました。お互い音楽が好きということもあり、「それぞれの現地語で1つの歌を歌うのはどうか」と考え、今回のプロジェクトが発足しました。

発足後は、※コアメンバーを中心に、一時帰国中や帰国直後の隊員たちに声をかけながらメンバーを集めました。結果的に21カ国76人の隊員等が、歌い手や演奏者として共に制作に入りました。

全体統括の岡本隊員はメンバー間の調整や著作権の対応などに奔走、宮田隊員は音楽編集や多重録音を、岩木隊員は動画編集を担当しました。私も動画編集を担当しましたが、当初は編集もYouTubeの使い方もろくにわからない状態でしたし、各メンバーが遠隔地にいながら1つの作品をつくり上げる難しさは想像以上でした。それぞれに苦労はありましたが、参加メンバーの素晴らしい歌声や楽器演奏、現地の小物や衣装を登場させるなど、工夫満載の動画素材を見るたびに胸が熱くなりました。隊員になって良かったと思った瞬間の1つです。このように、皆の現地に対する愛に背中を押されながらプロジェクトを進めることができました。

YouTube投稿後は現地の方から続々と暖かいコメントをいただいており、アップしてからわずか10日で両曲合わせた再生回数は1万6000回を超えました。また、現地だけでなく、日本国内での反響も大きいです。当初は現地向けと思っていたのですが、岡本隊員による地道な広報活動が奏功し、NHKや東京新聞など国内のメディアにも取り上げられました。さらに、参加した隊員からも「一時帰国でモチベーションが下がっていたが、元気をもらえた」という声も聞き、各方面から嬉しい反応をいただいています。

この状況がいつまで続くかはわかりませんが、今後もこのようなプロジェクトをはじめ、限られた状況でも世界のためにできることをするという姿勢を持ちながら、行動していければと思います。

コアメンバーの4人。左上から時計回りで、宮田さん、岡本さん、粟村さん、岩木さん

※ 岡本龍太さん（同上）、宮田結以さん（コスタリカ・フェンシング・2017年度4次隊）、岩木信輝さん（タンザニア・体育・2018年度2次隊）、粟村俊也（筆者）

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。

タンザニア

Field 1

教育

おかもとしょうた
岡本 翔太さん
（数学教育・2017年度3次隊）

PROFILE

1994年生まれ、福岡県出身。福岡大学理学部応用数学科を卒業後、2018年1月に青年海外協力隊員としてタンザニアに赴任。20年1月に帰国。

活動概要

コーラヒル中等学校（モロゴロ州モロゴロ市）に配属され、主に以下の活動に従事。

- ●数学授業の実施
- ●教員向けセミナーの開催支援
- ●キャリア教育の実施
- ●「ジャパンフェスティバル」の開催

試行錯誤を重ねながら より良い授業運営の方法を模索する

タンザニアの地方都市にある中等学校に配属された岡本さん。一教員として数学授業を担当するかたわら、同僚教員のレベルアップに向けたサポートにも取り組んだ。

岡本さんが配属されたのは、タンザニアの地方都市にあるコーラヒル中等学校。同国の中等教育は6年間で、4学年の「前期」と2学年の「後期」に分かれる。コーラヒル中等学校は「前期」のみを擁する学校だ。生徒数は約1000人。岡本さんのメインの活動となったのは、1年生の数学授業を行うこと。着任は、2018年度の開始と同時期の同年1月で、18年度は約60人のクラスを2つ、19年度は約90人のクラスを3つ受け持った。時間割は1コマ40分間。1年生の数学授業は週に6コマずつとなっていた。

任期前半は試行錯誤の連続

同国では、小学校まではスワヒリ語、中等学校からは英語で授業を行うよう定められている。そのため、中等学校の1年生では「英語」が授業の障害となる。岡本さんが数学授業を開始すると、ただでさえ小学校の学習事項の理解が不十分であるのに、さらに新たな事柄を英語の説明で理解していくのは、生徒たちには困難な様子だった。一方の岡本さんも、協力隊の派遣前訓練で英語を学んだものの、仕事で使うのは初めてのこと。そうして早々に力を入れたのは、「言葉」による説明を補うような自作の教具の導入だ。

生徒の反応が特に良かったのは、「動き」のある教具だった。例えば、「体積」を教えるための教具。1000立方センチの立方体の容器に水が溜まっていく自作のアニメをパソコンで上映しながら、パソコンの背後に置いたボウルに、水を満杯にした1リットル入りのペットボトルから水を注いでいく。「リットル」と「立方センチ」の関係を理解させるための教具だが、1000立方センチの立方体の容器が現地で手に入らなかったことから、代わるものとして考案した。

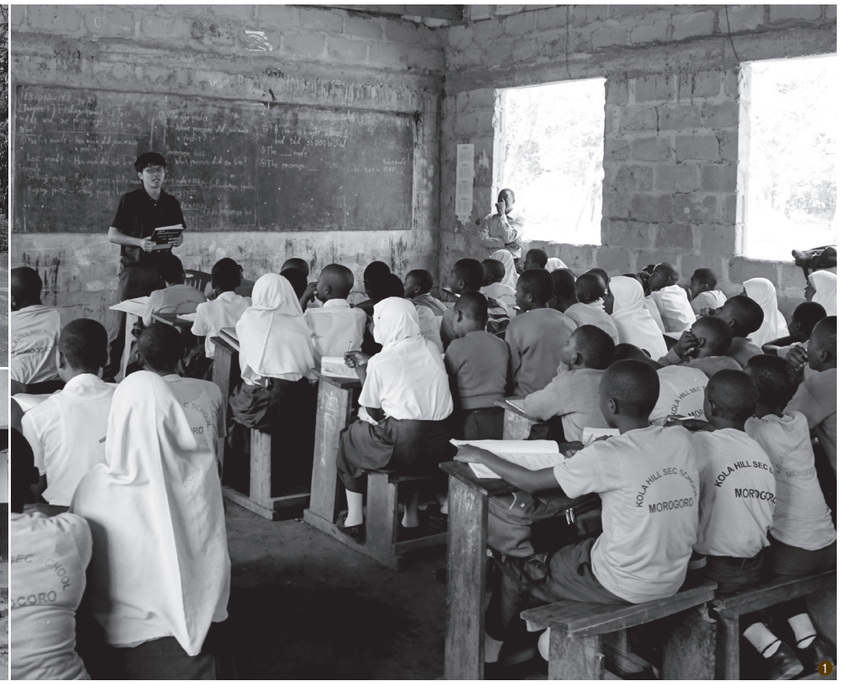
こうした視覚に訴える教具は、生徒たちの興味を引き付ける効果があった。しかし、だからと言ってその実演に時間を割いていると、口頭で伝えなければならないことを伝えきれないまま、時間切れとなってしまう。そうして、「授業運営」の要領をつかむための試行錯誤が始まった。口頭の説明に十分な時間をとろうとすると、授業に対する生徒たちの集中力が薄れ、授業中の私語が増える。そこで、授業への生徒たちの興味を引くために冒頭に「日本語講座」を行うなどの策を試してみたが、効果はなかった。ようやく生徒たちが騒ぐことのない授業ができるようになったのは、任期が2年目に入ってからだ。新年度に受け持つことになった1年生のクラスで、始めに3つのルールを設定した。「背筋を伸ばして授業を受ける」「物の貸し借りをする際は投げて渡さない」「トイレなどで席を立つときは、手を上げて許可を得る」という3つである。半信半疑の試行だったが、前年度とは見違えるほど、授業は落ち着いたものになった。

同僚教員への働きかけ

岡本さんは数学授業を進めるかたわら、授業以外の場を利用して同僚の数学教員のレベルアップに向けたサポートにも取り組んだ。任期を通じてもっとも深くかかわったのは、30代前半の男性教員（以下、Aさん）だ。Aさんの担当は3年生。岡本さんが着任して間もないころから、「私の授業を見てほしい」と要望してくるなど、「自信」と「学ぶ意欲」を持っていることが感じられる人物だった。実際、彼の授業には「プレゼン能力の高さ」が見て取れた。例えば、「比例と反比例」の授業では、タンザニアの大家族が家で食事をしている写真を提示し、家族の人数が増えたときに、「必要な食べ物の量」や「ひとりひとりの座るスペース」がどう変わるかを生徒に質問。生徒の集中力を高めるような授業となっていた。

岡本さんの着任の半年後、AさんはJICAの研修員受入事業により、日本で数学教育に関する1カ月間の研修を受講。帰国すると彼は、「日本の生徒は数学がとても良くできる」と研修での驚きを吐露。以後、より良い数学教育のあり方について彼との間で議論を重ねるようになった。

岡本さんとAさんの最大の協働となったのは、任地の中等学校教員を対象としたセミナーの開催だ。岡本さんの任期が残り半年ほどとなったころ、Aさんが神妙な面持ちで岡本さんのもとにやって来て、「セミナーを開いてみたい。でも、どうすれば良いかがわからない」と口にした。「お金がない」「時間がない」などと言って煮え切らない様子のAさんに対し、岡本さんは「やるのか、やらないのか？やると言うなら、実現するまで全力で応援する」と背中を押した。そうして2人で企画を練り、実現したのは、岡本さんの帰国の2カ月前。任地の中等学校教員のニーズを踏まえた講座で構成する、丸1日のセミナーだ。内容は、現地の会計士による「会計」の講座など。中等学校のカリキュラムに新たに「会計」という教科が導入されたが、現地教員には対応するための知識がなかった。受講者は十数人。彼らの満足度は高く、事後のアンケートでは「2、3日の日程に増やしてまた実施してほしい」といったリクエストが寄せられた。「今度は、生徒の保護者を対象にしたセミナーを開きたい」。授業以外の形で現地の教育に貢献することを初めて経験し、自信を付けたAさん。以後もその役回りを継続してくれるだろうとの期待を持って、岡本さんは帰国の途につくことができた。



❶生徒数が90人に及ぶ1年生のクラスで数学授業を行う岡本さん。クラスコントロールには試行錯誤を重ねた
❷コーラヒル中等学校の構内
❸Aさん（後列左から4人目）が主催した中等学校教員向けセミナーの受講者たち

任地ひとロメモ

〈モロゴロ〉

タンザニア最大の都市ダルエスサラームからバスで5時間の内陸にある市。都市圏の人口は約20万人で、キリスト教徒とイスラム教徒がメイン。写真に写る「バジャジ」と呼ばれる三輪タクシーが庶民の一般的な足だ。

トウモロコシ粉でつくる「ウガリ」を主食に、葉物野菜を煮込む「ムチチャ」を付け合わせた現地の典型的な食。

Field2
保健・医療

中川理恵（なかがわりえ）さん
（看護師・2017年度3次隊）

PROFILE

1981年生まれ、神奈川県出身。聖路加看護大学（現・聖路加国際大学）で看護師と保健師の免許を取得。病院の小児科病棟と小児科外来に看護師として勤務した後、聖路加国際大学大学院看護学研究科に進学。在学中の2018年1月、JICAの大学連携プログラムで青年海外協力隊員としてタンザニアに赴任。19年9月に帰国し、復学。20年3月に同大学院の修士課程を修了。

活動概要

タンザニア最大の公的な高度専門医療施設であるムヒンビリ国立病院の小児科部門に配属され、看護の質向上支援に従事。

「現地で入手可能な物」で経鼻経管栄養法を安全なものへと改善

タンザニア最大の高度専門医療施設の小児科部門に配属された中川さん。「タンザニア最大」とは言え、継続的に入手できる物品に限りがあったなか、その制約のなかで可能な看護技術の質向上の支援に取り組んだ。

中川さんが派遣されたのは、タンザニア最大の都市ダルエスサラームにあるムヒンビリ国立病院。重症患者や専門治療を必要とする患者が全国の医療施設から送られてくる、同国最大の高度専門医療施設だ。配属された部署は小児科部門。中川さんの着任当時、「一般病棟」や「栄養失調病棟」など6つの病棟と外来で構成され、病床数は多い病棟で50床程度という規模の部門だった。

「観察」から活動を開始

中川さんは着任後、まずは各病棟を回って2、3週間ずつ仕事の様子を観察。解決できそうな問題点や、それらをどういう優先順位で解決すべきかが見えてきたが、「この病棟の問題解決に力を貸してほしい」というリクエストはなかなか出てこなかった。ようやく一つの病棟の男性看護師長（以下、Aさん）から「一緒に仕事をしよう」と声をかけられたのは、着任して半年ほど経ったころだ。重症患者の入院治療を行っている病棟（以下、重症病棟）である。

中川さんは病棟の課題についてAさんと討議した。両者が「達成すべき」と考えていた課題の一つが、「経鼻経管栄養法の改善」。ムヒンビリ国立病院では部署単位で「カイゼン活動」に取り組むこととなっており、重症病棟がそのテーマに選んでいたのも「経鼻経管栄養法の改善」だった。カイゼン活動とは、幹部からの「トップダウン」ではなく、現場スタッフの「ボトムアップ」で取り組む職場改善のこと。病棟のスタッフたちが自ら「達成に取り組むべき」と認識しているのであれば、その実現が見込めると考え、中川さんはそれを支援することにした。

経鼻経管栄養法とは、食事ができない患者の鼻から消化管へと管を通し、胃に栄養剤を届ける栄養補給法だ。重症病棟では、経口補水液や母乳、人工ミルク、ウジ（現地のお粥）、ムトリ（現地のバナナ製ポタージュ）などが栄養剤として注入されていた。問題だったのは、「管の先端が胃に届いているかの確認が不十分」「患者の上半身を適切な角度まで起こす『ポジショニング』を行わない」といった看護師のケアの不適切さにより、栄養剤が気管に入ってしまうという事故が起こっていたことだ。

中川さんがAさんと共に最初に行ったのは、「管の先端が胃に届いているか」を確認する方法の整理である。日本で経鼻経管栄養法が行われる際にとられる確認方法は、「管の先端にあるものを吸引し、『リトマス試験紙』を使って胃酸であるかどうかを確かめる」「管の口に『二酸化炭素検出器』を当て、管が気管に入っていれば出てくる二酸化炭素の有無を確認する」など。しかし、タンザニアでは国立病院と言えども、「リトマス試験紙」や「二酸化炭素検出器」の入手は容易ではない。そこで中川さんたちは、現場で継続的に手に入る物で可能な確認方法をピックアップしていった。そうして、「管の先端にあるものを吸引し、目視で胃の内容物であるかどうかを確認する」といった4つの方法のうち、状況に応じてできることを必ず複数行うといった手順を、重症病棟のルールとして固めた。

「ベッドサイドティーチング」で指導

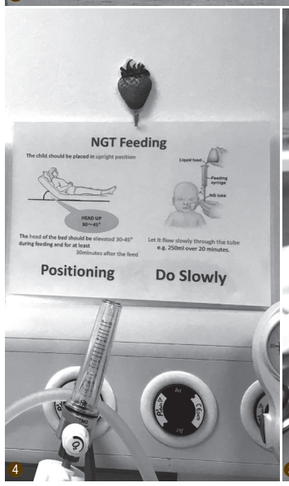
問題は、定めた確認手順をいかに病棟の看護師たちに徹底してもらうかだ。不適切な経鼻経管栄養法による誤嚥（ごえん）性肺炎で患者が死亡したケースは、それまでに2件。日本では一件発生しただけで大ごととなるであろう医療過誤だが、重症病棟では「わずか2件」ととらえられていた。そのため、定めた確認手順の労をとる意義がなかなか理解されなかった。

そうしたなか、中川さんは複数の方法で働きかけを実行する。その一つが「勉強会」だ。任期中、適切な経鼻経管栄養法に関する講義形式の勉強会を3度にわたって開いた。初回の講師はAさんに務めてもらったが、その後、技術の向上に意欲を持つ看護師がいるとわかったことから、残りの2回は彼女たちに依頼。すると、「教える立場」に立つ経験により、教えたことは自分自身が実践しようという意欲につながることがわかった。そこで中川さんは、普段の業務のなかでも、新たに着任した看護師やインターン看護師などへの経鼻経管栄養法に関する指導は、努めて同僚看護師たちにやってもらうようにした。

そうした勉強会の難点だと中川さんが感じたのは、「費用対効果」だ。タンザニア人が行う講義は、とかく時間が長い。するとその間、病棟では患者を放っておくことになる。そうして任期の半ばごろから中川さんが力を入れるようになったのは、「ベッドサイドティーチング」だ。中川さんは重症病棟での活動を開始して以来、清拭（せいしき）、体位変換、オムツ交換、シーツ交換など日常のさまざまな看護ケアを同僚看護師たちと共に行いながら、折に触れて「ベッドサイド」で経鼻経管栄養法のアドバイスをしていった。

当初、中川さんの「ダメ出し」に同僚看護師たちは耳を傾けてくれなかった。タンザニアの看護師隊員は身体への侵襲（しんしゅう）*2行為ができないために、注射ひとつ打とうとしない中川さんの発言は説得力がなかった。状況が一転したのは、現地で行われているやけどの処置の手順を教わり、「器械出し」でチームの一員としてケアに加われるようになってからだ。器械出しとは、滅菌されたピンセットなどを、処置をする人に不潔にならないように渡す作業。慣れた作業で手際が良かったこともあり、同僚看護師たちがにわかに中川さんの発言に聞く耳を持つようになった。そうして、重症病棟での活動を始めて一年ほど経った時期、中川さんは経鼻経管栄養法に関する同僚看護師たちのケアの状況を調査した。その結果、13のケースのうち、約8割で適切な管の位置確認やポジショニングが行われるようになっていたのだった。

＊1 誤嚥性肺炎…食道に入るべきものが気管に入ってしまう「誤嚥」によって生じる肺炎。
＊2 侵襲行為…生体内になんらかの変化をもたらす行為。



❶ムヒンビリ国立病院の小児科部門に設置された、人工呼吸器を備える集中治療室で同僚看護師に「ベッドサイドティーチング」を行う中川さん。タンザニアで初となる小児科の集中治療室だ
❷ムヒンビリ国立病院の外観
❸経鼻経管栄養法を施されている重症病棟の子ども
❹適切な経鼻経管栄養法の手技の定着を目的に、その要点をまとめたポスターを重症病棟のすべてのベッドの前に貼り出した

任地ひとロメモ
〈ダルエスサラーム〉

タンザニアの法律上の首都はドドマだが、政治や経済などの面で実質的な首都機能を持つのは、かつて首都だったダルエスサラーム市だ。港町であり、主要隣国への玄関口ともなっている。

白身魚とイモのフライのセット「Chipsi na samaki」が、港町であるダルエスサラームならではの定番メニュー。

特集

協力隊後の生き方

～地域づくりの仕事～

「外」から日本を眺め、その魅力や課題にあらためて気づくことができるのが、協力隊経験で得られる財産の1つ。それを生かして、帰国後に日本で「地域づくり」に携わりたいと志す協力隊員も少なくない。ここでは、その実践例を集めてみた。

町議会議員

群馬県みなかみ町（まち）

出身地の町で「教職」と「協力隊」の経験をベースに町政に参画

観光業が重要な産業である群馬県利根郡みなかみ町。その町議会議員として、「教職」と「協力隊」という2つの経験を武器により良い町政の実現に取り組む牧田さんに、仕事の様子を伺った。

Makita Naoki
話：牧田直己さん（モンゴル・体育・2015年度2次隊）

PROFILE

1988年生まれ、群馬県出身。大学院修了後、高校に体育科教師として2年間勤務。2015年10月、青年海外協力隊員としてモンゴルに赴任。小・中学校の体育授業の質向上に向けた支援に取り組む。17年10月に帰国。国内外で木材の販売事業や植林事業、環境保全を行う企業での営業職を経て、18年9月にみなかみ町の町議会議員に就任。

――みなかみ町の町議会議員選挙に出馬したいきさつをお教えください。

議員の改選は4年ごとで、私が出馬した選挙があったのは協力隊の任期終了の約1年後でした。帰国した当初は、町議会議員という仕事に就くことは頭になかったのですが、半年ほど経ったころから、地元の住民の方々が熱心に勧めてくださるようになり、出馬することになりました。そのおひとりは、協力隊に参加するときに非常に喜んで、「世界を見てこい」と背中を押してくださり、帰国の挨拶に行ったときから「何かをやってもらいたい」というようなことを口にされていました。私が当選できたのは、この方と同じように、『外』を経験した若い人材」に期待する住民が多かったということではないかと思っています。

私が帰国の時点でその先の進路について漠然と考えていたのは、「教育」と「地方活性化」の2つが重なり合うような仕事をしたいということでした。しかし、どのような仕事がそれに該当するのかがわからず、まずは民間企業に勤めながら自分の将来の生業について考えました。「町議会議員への立候補を」と声をかけていただいたのは、そんな時期です。「政治」の世界に怖さを感じていたこともあり、しばらく固辞し続けていたのですが、「町議会議員なら、きみが望む『教育』と『地域づくり』ができる」と伝えられ、出馬を決意するに至ったのでした。

――教職に戻ることは考えていなかったのでしょうか。

派遣前に勤めていた高校では、家庭環境に問題があって勉強どころではない生徒がいるなど、社会全体で解決に取り組まなければならない教育の課題があると感じていました。そのため、教師以外の形で教育にかかわりたいという思いを、派遣前から持つようになっていました。

――「地方活性化」への関心は協力隊経験を通じて高まったものでしょうか。

そのとおりです。日本とは言語も文化も異なる環境に身を置き、現地の方々に溶け込みながら活動を進めることは、日本とモンゴルを比較し、日本全体を俯瞰するとても良い機会になりました。そんな中、私の故郷であるみなかみ町の風景写真を使って、現地の子どもたちに町のことを伝えると、モンゴルとはまた違う奥深い緑の美しさや、透き通った水の豊富さからくる美しい景色や風情に、子どもたちは声を上げて感激してくれました。そこであらためて故郷のすばらしさを再認識することができました。しかし、帰国して2年ぶりに帰省した際の町の印象に大変驚きました。2年間離れていただけにもかかわらず、人が減り、ものすごい勢いで過疎化が進んでいる現状に、鳥肌が立ちました。みなかみ町は観光が重要な産業であり、最大の観光資源である「自然」は「ユネスコエコパーク」*にも登録されるすばらしいものです。その魅力をもっと輝かせ、群馬や日本が世界に誇る町にしたいと考えるようになりました。

――町議会議員として、具体的にどのような仕事をされているのでしょうか。

現在の議員数は17人で、議員はそれぞれ「総務文教」「厚生」「産業観光」という3つの常任委員会のいずれかに属して仕事を行います。私が所属するのは総務文教常任委員会で、所管は町の総務課や教育委員会が行う事業です。定例会は4半期に1回、約2週間の会期で開かれるのですが、その常任委員会や本会議で住民の目となり口となり、町政の執行機関である町長が提出する条例案や予算案などをチェックしたり、反対に条例案や意見書などの形で町政に関する提案を町長に対して行うというのが、会期中の仕事になります。

――牧田さんご自身はこれまでに議会でどのような提案をされたのでしょうか。

さまざまな提案を行っていますが、最近では、コロナ禍を受け、学校教育での早期オンライン化の必要性を訴えてきました。授業をオンラインで行うことも重要ですが、それ以上に、長期にわたり教師と児童・生徒が関係性を持てないことに、「なんとかしないと」と強く感じていました。そのため、町当局に対し、タブレット端末の早期購入と地域のインターネット環境整備の強化を、同僚議員や地域住民の方々の協力のもと、提案してきました。そうした提案をするのは、学校教育の現場を経験し、かつITに慣れている若い世代の私が果たす役目だと考えています。みなかみ町の議員は、農業や建設業、宿泊業など、本職をほかに持つ方が大半で、それぞれ自分の得意とする分野での議員活動に力を入れています。

――今のお仕事に協力隊員経験が生きていると感じている点は？

何かしらの「提案」をする際の「まずはやってみせる」という姿勢は、協力隊経験で得たものだと思います。例えば、オンライン授業の導入について、常任委員会で発言するだけでなく、町長のもとに足を運んで「試しにやってみましょう」とZoomを実際に体験していただいたり、知人の教師に協力を仰いで小学3年生のクラスでオンライン授業を試したりしました。こうした姿勢は、協力隊時代に現地の先生方に体育授業のやり方を提案する際、試行錯誤を重ね、バスケットボールの授業展開を実演するなどして受け入れてもらえた経験で身に付けたものでした。

❶牧田さんが住むみなかみ町後閑地区の住民を対象に開いた、町政に関する意見交換を行う「報告会」。住民の思いを吸収する重要な機会の1つだ

❷ユネスコエコパークにも登録されているみなかみ町の豊かな自然

――今の仕事でどのような点におもしろさを感じていますか。

議員になってわかったのは、町をもっと良くしたいと考えている住民がたくさんいらっしゃることです。そういう方々と、ああでもない、こうでもないと共に考え、それを町政への具体的な提案へと形にしていく役目は、非常にやりがいを感じます。町内を歩いていると「ちょっとうちに寄ってきな」と声をかけられ、お茶やかりんとうを楽しみながら世間話をする。そんなプライベートでのゆったりとした付き合いのなかで、住民の方々の困っていることなどが見えてきて、その解決に向け行動する。日頃からそうした人と人との繋がりを大切にすることは、協力隊時代に現地の方から日々の付き合いで学んだことにほかなりません。

――今後の抱負をお聞かせください。

みなかみ町は、「豊かな自然」だけでなく、地域で人を大切にするというこの上なく素晴らしい文化があり、多くの「人財」がいる地域です。そのような面を多くの方々に知っていただき、みなかみ町に関心を持っていただくことで、足を運んだり移住したりしていただける地域となるよう努めていきたいと思います。

先日、移住してきた協力隊OB・OGと共に、みなかみ町について知ってもらうためのオンラインのセミナーを行い、70人を超す方々にご参加いただきました。今後も、みなかみ町に関心を持ってくださった方や地域の方々と一緒に、より暮らしやすく、素晴らしい地域となるよう、地域づくりに努めていきたいと思っています。

＊ユネスコエコパーク…UNESCOの登録制度である「生物圏保存地域」の通称。豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進めるモデル地域が登録対象。

CASE2 保健・医療

村役場の保健師

鹿児島県鹿児島郡十島村（としまむら）

医療体制が脆弱な村の保健師として、住民の健康増進事業に従事

7つの有人島と5つの無人島からなる鹿児島県鹿児島郡十島村。1つも病院がないという脆弱な医療体制の同村で、村役場の保健師として働く協力隊経験者の上野さんに、その仕事の様子を伺った。

KAGOSHIMA-KEN
TOSHIMA-MURA

話：上野陽子（Ueno Yoko）さん（バヌアツ・看護師・2014年度4次隊）

PROFILE

1989年、鹿児島県出身。日本赤十字九州国際看護大学を卒業後、看護師として鹿児島市の市立病院に、保健師として同市の保健所に勤務。2015年4月、青年海外協力隊員としてバヌアツに赴任。地方の保健行政機関に配属され、学校保健や地域保健に関する事業の支援に取り組む。17年4月に帰国。現在は、鹿児島県鹿児島郡十島村の村役場に保健師として勤務。

――十島村役場の保健師に就かれたいきさつをお教えください。

協力隊員として配属されたバヌアツの保健行政機関の管轄地域には、医療体制や交通インフラが整っていないがゆえに、住民が病気に罹ると手遅れになりがちな島を管轄していました。そうした島では、病気やけがに関して「治療」よりも「予防」が重要だということで、それらの予防啓発に力を入れました。その経験を生かせる職だと考えて応募したのが、十島村役場の保健師のポストです。「出身地の鹿児島県で、医師が常駐しない地域の医療職」という条件で求人情報を探すなかで見つけたポストでした。

――村ではどのような医療体制が敷かれているのでしょうか。

十島村は7つの有人島と5つの無人島からなる人口約700人の村です。いずれの有人島にも病院はありませんが、村立の「へき地診療所*1」が1つずつ置かれ、村役場所属の看護師が2人ずつ常駐するほか、もっとも人口が多い中之島（なかのしま）の常駐医として鹿児島赤十字病院の医師が3カ月交替で勤務しています。中之島の常駐医や、鹿児島赤十字病院と県立大島病院の医師が各島を月に2回ずつ巡回し診療を行っていますが、普段、一次的な診療に従事するのは常駐する看護師たちです。一方、病気の予防や早期発見に関する事業は、私が所属する村役場の住民課が担当しています。同課に配置されている保健師は4人で、「介護」や「母子」など分野別に業務を分担しています。私の担当は、「成人」「歯科」「感染症」などの分野です。村役場の庁舎は村外の鹿児島市内にあり、私も普段はそこで働きつつ、月に2、3回のペースで各島に出張するという勤務形態になっています。

――上野さんが担当している業務の具体的な内容をお教えください。

一つは、成人の健診やその結果を踏まえた保健指導の実施です。健診は受診者が病院に赴いて受けるのが通常ですが、十島村では、役場の職員と中之島常駐医が各島を回り、公民館で診療所の看護師と協力しながら実施しています。

「歯科」に関しては昨年、虫歯予防のために、フッ化物*2の薬剤を使ってうがいをするフッ化物洗口事業を始めました。いずれの有人島内にも歯科医がおらず、住民が虫歯になると治療のために島外に通わなければなりません。そこで、「予防」を強化するために立ち上げたのがこの事業であり、協力隊時代に離島を回って子どもたちに歯磨き指導を行った経験が生きています。対象は未就学児と小・中学生で、洗口液の作成や洗口の実施は園や学校の先生方に委託しています。私が担うのは、フッ化物洗口に必要な歯科医の指示書や保護者の同意書の取り付け、先生方への洗口方法の指導などです。

新型コロナウイルスの感染拡大により、住民の多くが「水際対策を強化してほしい」と要望したことから、来島者に「健康申告書」を提出していただくルールを私が提案し、実際に導入されることとなりました。島内で提供できる医療に限りがあることを踏まえたものです。健康申告書のアイデアは、協力隊時代の派遣国であるバヌアツで、入国者に健康申告書の提出が義務づけられているのを知って着想したものでした。同国は国内の医療体制の脆弱さを踏まえ、2月にいち早くこの措置をとっています。十島村の健康申告書の中身も、バヌアツのものを参考に私がつくりました。

――医療体制が脆弱な場所で活動した協力隊経験が、さまざまな形で今の仕事につながっているということですね。

地域の人々の健康を左右する要因には、「医療体制」以外にも、「気候」などさまざまなものがあるかと思います。例えば、バヌアツは雨の降らない日が続くと野菜の収穫が難しくなるため、野菜の摂取量が減り、栄養の偏りが大きくなります。私は協力隊時代にその課題の解決に取り組むことにしたのですが、そこで現地の方から、「ここでは『グリーン・パパイヤ』ならいつでも手に入る。野菜の代わりになるのでは？」といったアイデアをいただき、活動に取り入れることができました。そうした経験を通じて、「地域に与えられている条件を前提に、そのなかでどれだけ住民の健康を高めるか」を考えることが、地域保健では重要なのだと学びました。それが今の仕事でもベースになっていると感じています。

その一例が、「散歩コース」の考案です。十島村ではメタボリックシンドロームの増加が問題なのですが、いずれの島にも「スポーツジム」や「公園」がありません。しかし、それらをつくって住民の運動不足を解消するというのは、村の財政上、容易ではない。そうしたなか、保健指導を受けた住民と一緒に、楽しんで歩けるような「散歩コース」を考え、散歩の習慣化を住民に勧めるという取り組みを提案しました。これは、「与えられている条件を最大限に生かす」という姿勢があったからこそのアイデアだったと思います。

――今の仕事で感じている困難は？

生活習慣病の予防には、「飲酒」や「喫煙」をやめるなどの「行動変容」が必要です。しかし、ほかの娯楽が少ない地域でそれが容易ではないことは、バヌアツでも十島村でも同じように感じることです。村の住民に健康指導をしても、「ぽっくり逝くから、俺のことは気にするな」と言われてしまいます。「ぽっくり逝けませんよ」と伝えたいのだけれども、難しい。と言うのも、重症化した患者はみな村外の病院に入院するため、島では闘病で苦しむ様子を目の当たりにする機会がないからです。今後、闘病で大変な思いをした方に体験談をお話しいただくプログラムを実施したいと考えています。

❶村内の島の小学校で、児童を対象に虫歯予防の指導をする上野さん
❷船に検診車を乗せ、村役場の職員が各島を回って行う検診の様子
❸村外にある役場の庁舎と島の間で行った、食生活改善推進員のオンラインの会議。新型コロナウイルスの感染拡大前から、こうしたシステムを多く活用してきた

――仕事のやりがいを感じるのは、どのような場面でしょうか？

島に出張で赴く際は、向かう船のなかで住民の方に声をかけたり、赴いた先の島で家々を回ったりして、住民の方々の健康に関する問題を察知するよう心がけています。それを積み重ねてきたことで、最近は「肌にブツブツができた。どこの皮膚科に行けば良いのか？」といった些細な質問を、電話で私に投げかけてくださる住民も増えてきました。協力隊活動と同様、「現地の課題を知ること」が今の仕事でも第一歩なので、そうした関係を住民の方々と築けつつあるのはうれしく、もっと多くの方のお困り事に耳を傾けていきたいと思っています。

――最後に、今後の抱負をお願いします。

十島村の住民の方々には、「ずっと暮らして来たこの島で、この波や、この風の音を聞きながら死を迎えたい」という思いがあります。しかし、村内には火葬場がなく、家族に迷惑をかけたくないという思いから、村外で最期を迎える方がほとんどです。そうしたなか、「終末」の迎え方をあらかじめ本人と家族などで話し合う「アドバンス・ケア・プランニング」について語る場を設けることを、介護担当の職員を中心に始めています。へき地だからこそ存在する、複雑かつ大切なそうした問題について、方向性を見つける力になればと考えています。

*1 へき地診療所…他の医療機関へのアクセスの難しさなどに関する一定の条件のもと、例外的に常駐する医師の有無を問わず設置が認められた診療所。
*2 フッ化物…フッ素が含まれる化合物。

CASE3 外国人支援

人材派遣会社の日本語教師

島根県出雲市

日本語教師として日系ブラジル人と地域のつなぎ役に

SHIMANE-KEN
IZUMO-SHI

多くの日系ブラジル人をメーカーの工場などに派遣している人材派遣会社のフジアルテ株式会社。社内に初めて開設された日本語教室の運営に携わっている協力隊経験者の木谷さんに仕事の様子を伺った。

話：木谷恵子（Kitani Keiko）さん
（日系社会青年ボランティア／ブラジル・日系日本語学校教師・2014年度派遣）

PROFILE

1986年、島根県出身。大学卒業後、出版社で広告営業に携わるかたわら、日本語教師養成講座に通う。2014年7月、日系社会青年ボランティアとしてブラジルに赴任。日系団体のサントアマーロ日伯文化協会が運営する日本語学校（サンパウロ州）に配属され、主に子どもへの日本語教育に取り組む。16年7月に帰国。現在は人材派遣会社のフジアルテ株式会社で日本語教室の運営に従事。

※派遣名称は派遣当時のものです。

――フジアルテ株式会社で木谷さんが運営を担当されている日本語教室の概要をお教えください。

フジアルテは日本各地に営業所を構える人材派遣会社で、私が勤務する出雲市の営業所では、約1000人の日系ブラジル人を雇用し、地元にあるメーカーの工場に製造スタッフとして派遣しています。私が担当しているのは、彼らのうちの希望者を対象とする日本語教室の運営です。受講者の勤務の時間帯はまちまちであるため、90分間の講座を毎日5回開き、各自の都合に合わせて受講してもらうようにしています。現在の受講者数は毎講座10人程度で、教室の運営は私が1人でこなしています。

――今の仕事に就かれたいきさつは？

出雲市で暮らす日系ブラジル人は3000人を超えているのですが、私が帰国して最初に就いた仕事は、彼らのために、ポルトガル語の通訳や翻訳をする出雲市役所の非常勤の職でした。その仕事をするなかで、日本語がわからないために苦労しているような日系ブラジル人の方もいることを知り、やがてボランティアで日本語教室を開くようになりました。その活動を知ったフジアルテの社員に、「雇用する日系ブラジル人を対象とした日本語教室を社内に立ち上げたいので、力になってほしい」と誘われたのでした。入社は2017年です。日系ブラジル人を多く派遣している営業所はほかにもあるのですが、日本語教室の開設はフジアルテとして初の試みであり、教科書の選定など、すべてが一からのスタートでした。

――授業はどのような方式や内容にしているのでしょうか。

当初は一斉授業を試みたのですが、受講者の日本語力のばらつきが大きかったため、それぞれのレベルに合ったプリントで学習してもらいながら、個別指導をして回る方式に変更しました。フジアルテでは、雇用する日系ブラジル人の中で比較的日本語力が高い人を「リーダー」に任命し、日系ブラジル人社員と派遣先企業との間の交渉事はすべてリーダーを通して行うというルールを設けています。そのため、リーダーたちの日本語力を上げることが日本語教室開設の狙いだったのですが、蓋を開けてみると、日本語をほとんど話すことができないリーダー以外の受講希望者が多かったのでした。

――リーダー以外の方はどのような動機で日本語を学ぶのでしょうか。

「生活で必要だから」という動機のほか、「地域の日本人と親しくなりたい」といった動機で学ぶ方も多いです。出雲市で働く日系ブラジル人たちは、多くの時間を仕事に費やすため、地域の日本人と知り合うチャンスがなかなかありません。そんななか、日本語を身に付けることで、日本人と知り合う可能性を少しでも広げたいと考えている方が多いようです。

――教室運営の難しさは？

会社の事業として運営する教室ですから、「日本語能力試験でより高いレベルに合格する」という具体的な「成果」が求められます。しかし、忙しい仕事の合間の勉強であるため、試験に合格する前に挫折してしまいがちであり、いかにして彼らに高いモチベーションを保ってもらうかが、一番の難しさだと感じています。一斉授業から個別指導に変更し、学習の負担を軽くしたのも、その対策の一つです。また、私がボランティア活動として地域の日本人を対象に開いている「ポルトガル語教室」や「ブラジル料理教室」に日本語教室の受講者を招くなどして、日本語を使う機会を増やす工夫もしています。そうした対策の結果、リーダー以外の受講者の7割が日本語能力試験の初級レベルに合格するようになり、なかにはリーダーに登用される人も出てくるようになりました。一から日本語を学び始めた受講者から、「1人で病院に行けた」「派遣先の日本人社員が話していることが理解できた」といった報告を受けると、仕事のやりがいを感じます。

――お話に出たポルトガル語教室やブラジル料理教室の概要をお教えください。

いずれも、島根県で暮らす外国人の支援に取り組むNGOから依頼を受け、運営を担当するようになったもので、不定期に開催しています。ポルトガル語教室の受講者はさまざまで、「仕事で日系ブラジル人に応対できるようになりたい」という消防士、「子どもの友達に日系ブラジル人の子がいるので、その親御さんと親しくなりたい」というお母さん、日系ブラジル人の子どもが通う小・中学校の先生などです。最初は私自身が講師を務めたのですが、せっかく地域にポルトガル語のネイティブ話者がいるのにもったいないと思い、日本語教室の受講者にも参加してもらうようになりました。ブラジル料理教室でも、日本語教室の受講者のなかの料理が得意な方に講師を依頼しています。

私はブラジルに赴任した当初、ポルトガル語もまだ十分に話せず、現地の人にあれこれ教えてもらわなければ何もできなかったため、無力感に苛まれました。「教えてもらうばかりではない」と自信を持つことができたのは、日本語教師としての活動が始まり、「現地の人に教える」という立場に立ったときでした。日系ブラジル人の方々も、私と同じような無力感に苛まれるのではないかと思います。だからこそ、ポルトガル語教室などで「教える立場」に立ってもらうことは、自信を持って地域社会に参加するために重要だろうと考えています。出雲市で働く日系ブラジル人たちは、母国で医師や警察官、弁護士、先生、エンジニア、パティシエなど、さまざま職に就いていた方々です。私はブラジルで、そうした職の日系ブラジル人たちが生き生きと働いている姿を見てきています。そのため、「工場で働く日系ブラジル人」とひと括りにされてしまいがちな彼らが、それぞれの得意技を発揮して活躍する場をつくりたいという思いがあり、ポルトガル語教室などはそれが実現した例でもあります。

――今後の抱負をお聞かせください。

日本語教室は会社にも存在意義が認められ、他県の営業所でも開設されるようになりました。第1号の教室を運営する立場として、今後もより良い教室のあり方を模索していきたいと考えています。

日本語教室の受講者を講師に招いて開くポルトガル語教室やブラジル料理教室は、彼らと日本人受講者の双方に好評なので、今後も継続していければと考えています。日本語教室の受講者が日本人と付き合う機会が少なかったころは、「日本人は日系ブラジル人と親しくなりたいと思っていないようだ」と口にしていました。一方、地域の日本人からは、「近所に日系ブラジル人が住んでいるけれども、ポルトガル語で話されたら会話が続かないと思うと、話しかけるのをためらってしまう」という声を聞いていました。そんなもどかしさを感じていた両者をつなぎ、「互いに名前で呼び合える関係」を築き、支えることは、ブラジルで暮らした経験を持つ私が取り組むべき役目の一つだと思っています。

❶フジアルテの日本語教室の受講者たち
❷多くの日系ブラジル人が暮らす出雲市の斐川（ひかわ）地域
❸ブラジル料理教室で交流する日系ブラジル人と地元の日本人たち

CASE4 コミュニティづくり

コミュニティカフェの経営者

長野県岡谷市

世代を超えて地域住民がつながる場となるカフェを経営

自身の幼少期とは様変わりし、シャッター街ばかりとなってしまった長野県岡谷市。Iターンをしてそこにコミュニティカフェ（＊）をオープンし、住民どうしのつなぎ役を務める吉江さんに、仕事の様子を伺った。

話：吉江勇介（Yoshie Yusuke）さん（ラオス・村落開発普及員〈現・コミュニティ開発〉・2006年度2次隊）

PROFILE

1979年生まれ、長野県出身。大学卒業後、自動車ディーラーの営業職を経て、2007年1月に青年海外協力隊員としてラオスに赴任。農村部で特産品開発などに取り組む。09年1月に帰国。（公社）青年海外協力協会や、展示会の企画・運営などを行う会社での勤務を経て、16年、長野県岡谷市に「カフェ・ヒルバレー」をオープン。

NAGANO-KEN OKAYA-SHI

「カフェ・ヒルバレー」
https://chinoshio-hillvalley.jimdofree.com

――経営されている「カフェ・ヒルバレー」の概要をご紹介ください。

長野県岡谷市の中心街の30坪ほどのカフェです。開店は、協力隊の任期を終えて8年ほど経った2016年です。メニューは、8種のコーヒーを始めとするドリンク、バスクチーズケーキやパンケーキなどのスイーツのほか、サンドイッチやローストビーフ丼などのフード類もあります。開店以来、アルバイトを雇う以外は私一人で切り盛りしています。

――開店までの経緯をお教えください。

私は協力隊経験を通じて、いずれ派遣国のラオスに観光ホテルをつくり、外貨獲得の力になりたいという思いを持つようになりました。現地には日本人が快適に過ごせるようなホテルが少なく、せっかく観光資源が豊富なのにもったいないと感じたからです。しかし、ホテルの経営に必要なビジネスの知識がまったくなかったので、帰国後、まずはビジネスの経験を積むために日本国内で働くことにしました。転機となったのは、「展示会」の企画や運営などを行う東京の企業の社員として、カフェ業界の展示会を担当したことです。食材や設備などを提供する生産者やメーカー、カフェの経営者など業界のさまざまな関係者の間をつなぐ趣旨のイベントでした。その仕事を通じて得た知識や人脈を活用して、カフェを経営すれば、ビジネスの知識を蓄えることができるだろうと思い、実行しました。

――岡谷市に出店した理由は？

都市部では競合店が多いため、初めて店を持つ者では太刀打ちできないだろうと考え、当初から「地方」に目を付けていました。岡谷市で開業したきっかけは、地元での起業を希望する人に向けて起業のノウハウを教える同市商工会議所主催のセミナーに参加したことです。地域の活性化を目的とした同種のセミナーは全国各地で開かれているのですが、地元の商工会議所や銀行、自治体などとのコネクションがつくれる場でもあるため、その地での起業には有益です。私も起業前にそれを受講しようと、出身地である長野県上伊那郡辰野町やその近辺での開催状況を調べたのですが、その時期に予定されていたのが、辰野町に隣接する岡谷市の商工会議所によるものでした。私が幼いころには賑わいを見せていた商店街が、今ではシャッター街となり、若者が遊べる場所もゲームセンターくらいになってしまった。それが非常に寂しく、なんとか地域が元気になるために力になりたいとの想いもあったことから、セミナーを修了した後、市内で見つけた現在の物件を借りて開業することにしたのでした。

――どのようなカフェにしようという方針で経営されているのでしょうか。

多くのビジネスに通じることかもしれませんが、「店」のカラーはお客様につくっていただくものだと考えています。当初は、地方ではなかなか飲めないような高級なコーヒーを売りにしようとしたのですが、蓋を開ければ、思ったほど客足が伸びなかった。結局、売り上げが安定するようになったのは、「高級さ」や「値段」などにはこだわらず、『焙煎師』が手仕事にかける情熱」など、「背後の物語」にインパクトがあるようなメニューを提供することに力を入れ始めてからでした。

「『店』のカラーはお客様につくっていただく」という点は、メニューの選定以外でも心がけるようにしています。その一つが「内装」です。店内の一番面積の大きな壁には、小さな海の生き物たちで表現する大きな鯨の絵が描かれているのですが、作者は地元のグラフィックデザイナーです。彼女はかつてお客様としてやってきて、コーヒーを飲みながら絵を描いていた方です。あるとき「素敵な絵ですね」と声をかけたところ、「将来はグラフィックデザイナーになりたい」という夢を語ってくれました。その絵がとても素敵だったので、「将来などと言わずに、今なってもらおう。せっかく描いてもらうならば、思い切り躍動感のある作品を」と思い、依頼しました。ご本人はとても驚いていましたが、喜んでいただけたようでした。現在、当店のコアなお客様ははっきりと2タイプに分かれます。一つは、おいしいコーヒーを飲みながらおしゃべりを楽しみたい方で、およそ2割。残りの8割は、岡谷市ではまだまだ珍しい「おしゃれな空間」でおしゃべりを楽しみたいという方々で、鯨の絵が当店の大きなカラーの一つになっていると感じています。

そのほか、お客様の要望に応じて各種イベントの会場として使っていただくようにしているのですが、そうした「コミュニティスペース」としての役割を担っていることも、お客様によってつくっていただいた当店のカラーの一つだと思います。

――具体的にどのようなイベントが行われているのでしょうか。

「岡谷を今後、どのようにしていくべきか」を語り合う会や、弦楽のコンサート、ヘヴィメタルを聴く会などです。そうしたイベントのアイデアは、お客様どうしの会話のなかで生まれています。当店は現在、中学生から80代の方まで、幅広い年代の住民の方々に繰り返し通っていただけるようになっています。当店に来ていただいた以上は、年齢も職業も関係なく、いずれも同じ「カフェ・ヒルバレーに来ていただいた近くの住民」として、互いの人生や岡谷の問題についてざっくばらんに話をする関係になっていただきたい。そのためにも、私はコーヒーを淹れながら、カウンター越しにお客様に声をかけ、誰かほかのお客様とつなげて、おもしろいイベントの企画が生まれないかなどと常に探っています。

❶「カフェ・ヒルバレー」の店内。壁に描かれている鯨の絵は、常連客のグラフィクデザイナーに描いてもらった作品だ
❷同店で開催された弦楽のコンサート
❸看板メニューの1つとなっているバスクチーズケーキ。東京の専門店の味を再現するべく、試行錯誤して開発した

――協力隊の経験が今の仕事に生きているとお感じになっている点は？

お客様と話をしているとよく、「いろいろなことを知っていますね」と言われます。ラオスや東京で働いたなかで知ったことを話しているからだと思いますが、地域の「外」での経験を地域内に伝える役回りは、実はカフェの経営をしていると果たしやすいのだろうと感じています。インターネットで私が協力隊経験者であることを知って来店してくださる協力隊志望者も多く、ここで私の体験談を聞いて応募したという方も少なくありません。

――今後の抱負をお教えください。

「地方」で経営するカフェは、さほど多くのお客様は見込めません。それでも、不動産にかかる費用は少ないので、なんとかやっていくことができる。そうしたなかでのおもしろさは、お客様との距離が近くなる点ではないかと思います。たくさんの会話をして、ひとりひとりの人生に触れることができる。その楽しさを知ったため、このカフェはラオスでホテルを経営するためにノウハウを蓄えることを目的に始めた仕事ではありましたが、今後、国内にもっと広げていきたいと思うようになりました。

＊コミュニティカフェ…地域の住民どうしを結ぶ機能を果たす飲食店。

私の引継書

～未来の協力隊員へ～

協力隊経験者たちに、「未来の協力隊員たち」に向けた活動報告を行っていただきます。

話＝今村（いまむら）めぐみさん
（マレーシア・障害児・者支援・2017年度1次隊）

PROFILE

1986年生まれ、福岡県出身。大学時代に精神保健福祉士の資格を取得。民間企業と精神障害者の就労支援施設に勤務した後、2017年7月に青年海外協力隊員としてマレーシアに赴任。19年7月に帰国。

活動概要

クダ州社会福祉局のビドン障害者ワンストップセンター（クダ州ビドン）に配属され、障害者に関する主に以下の活動に従事。

- ●就労支援システムの構築
- ●就労の受け入れ先企業の開拓
- ●家族などへの就労に関する啓発

Summary

州政府による、障害者の就労支援事業を活性化

活動の環境

私の配属先は、クダ州社会福祉局が設置するビドン障害者ワンストップセンターという施設で、その所管事業は、障害者の就労支援、障害当事者やその家族への情報提供などです。着任当時、配属先に障害者としての登録を求める人は月に1人いるかいないかという状態で、就労支援がほとんどなされていなかったことから、私は主にその仕組みづくりに取り組みました。

マレーシアでは、障害者の就労支援に必要な専門知識に関する研修を行い、その修了者に「ジョブコーチ」という肩書きを認定する制度を設けています。クダ州政府は、障害者の就労支援を行うために次のような施設を置き、その多くにジョブコーチを配置しています。

❶地域リハビリテーションセンター（以下、センター）

障害児・者が利用する通所施設。当時、州内の42カ所に設置されていました。企業などから仕事を受託し、利用者がそれをこなす授産*施設としての機能を備えつつ、就職が可能な利用者の就労支援ができるよう、多くにはジョブコーチが配置されています。

❷全寮制の職業訓練施設（以下、職業訓練施設）

「パンづくり」や「園芸」など、技能の習得に一定の訓練が必要な職業の訓練を行う全寮制の施設。州内数カ所に設置され、それぞれにジョブコーチが配置されていました。寮生活や訓練が可能だと判断された障害者が入所できます。

私は着任後、半年あまりをかけてセンターを30カ所ほど回り、以下のような項目についての聞き取り調査を行いました。

- ■就労可能な利用者がどれくらいいるか。
- ■周辺に就労を受け入れてくれそうな企業などがどれくらいあるか。
- ■ジョブコーチがいるか。
- ■就労がどれくらい実現しているか。

この調査で判明したのは、ある程度読み書きができるなど、簡単な仕事なら就職が可能と見られる利用者は多いにもかかわらず、「ジョブコーチたちは具体的に何をすれば良いのかがわからない」といった要因により、就労支援はほとんど行っていないことでした。

活動の内容

職業訓練施設では就労の実績が上がっているようでしたが、入所できる障害者は一部です。そうしたなか、私の配属先はセンターにおける就労支援をフォローする立場にあったことから、まずは配属先で就労支援の仕組みづくりとその運用を実現し、後にそのノウハウを各センターに広めていくという方針を立てました。

着任当時の配属先の職員は3人です。いずれもジョブコーチの研修を受けていない人であったことが、配属先で就労支援が停滞していた原因だったかもしれません。しかし、私が着任してまもなく、職業訓練施設に勤務していたジョブコーチが配属先に異動してきたため、風向きが変わりました。JICAのプログラムで半年間、日本でジョブコーチに関する研修を受けた経験もあった方であり、彼は「就労支援の仕組みづくりを」という私の提案を受け、ほかの同僚たちに発破をかけてくださり、配属先全体で次のような作業を進めることができました。

- ■障害者にいくつかの作業をしてもらい、どのような仕事に就けるかを評価する方法の標準化を図るため、チェック項目をリストにした「職業能力評価シート」を作成。
- ■簡単な訓練だけで就労可能なのは「皿洗い」や「掃除」などと予想された。そこで、センターから先行事例となり得る利用者を紹介してもらい、そうした作業の「簡易職業訓練」を試行。
- ■試行した簡易職業訓練の様子を動画に収め、SNSでセンターなどに配信し、就労希望の障害者に配属先への相談を勧めるよう依頼。
- ■州内の企業に対して、障害者の就労の受け入れを求める営業活動を実施。
- ■「就職先でいじめられる」「事件に巻き込まれる」といったことを心配し、子どもの就労に不安を持つ親が多いことから、実際に就労した障害者へのインタビューの動画を作成し、それを使った啓発活動を実施。

以上のような取り組みにより、その着手から任期終了までの1年あまりで約40人の就労を実現することができました。もっとも多かった就職先は飲食店で、仕事の内容は掃除や皿洗い、給仕などです。次に多かったのは、工場での単純作業の仕事です。

そうして回り始めた就労支援のシステムを、各センターに導入することは、時間切れとなって手を付けることができませんでしたが、今後、その点を含めて同州での就労支援の仕組みづくりが進んでいくことを期待しています。

＊授産施設…就職が難しい人に、就労や技能修得のための機会を与える施設。

Message

大切なのは、真摯に向き合う姿勢

配属先による支援で就労が叶った精神障害の方が、あるとき服薬を止め、状態が悪化して職場に通えなくなり、「騒いでいる」と下宿先の大家さんから配属先にクレームが入ったことがありました。家族がいない女性です。勤務時間を過ぎていたため、配属先で対応できるのは私だけだったのですが、私の判断で対処して良い事案ではありません。そこで、以前から付き合いのあった州社会福祉課の職員（以下、Aさん）に電話で相談したところ、精神科の病院に連れていくのに付き合ってくださり、事なきを得ました。そのとき言われたのが、「あなただから手伝った」という言葉です。

Aさんは、活動が思うように進まないときに私の悩みを聞き、私が「障害者の社会参加のお手伝いがしたい」という一心で活動していることを理解してくれていた方でした。何の権限も持たずに活動する協力隊員にとっての最大の財産は、見返りを求めずに活動に協力してくれるような現地の方にほかならないでしょう。そうしたAさんのような方の心をつかむために必要なことは、現場の状況への不満を嘆いてばかりいるのではなく、それを飲み込み、そのなかで自分にできることを探し、実行する真摯な姿勢を貫くことだというのが、私が協力隊活動を終えての実感です。

Photos

1 就労希望の障害者（右）に窓拭き作業をやってもらい、職業能力の評価を行う今村さん
2 配属先で開始した「簡易職業訓練」。同僚（左から3人目）が指サックの成形作業の指導をしている
3 就労希望の障害者（中央）の就職面接に同行し、作業の得意・不得意などについて本人に代わって企業の担当者（右）に伝える今村さん
4 配属先が「就職フェア」に出したブースで、同僚（左）と共に企業の担当者（中央）に障害者雇用について説明する今村さん

改善のための提案や行動をしたが住民の理解を得られなかった

文＝山崎尚子さん（ベナン・コミュニティ開発・2017年度2次隊）

ベナンのナガイレ村で保健分野を中心とした任地の住民の生活改善に携わりました。住民と同じ生活をし、ともに働き、信頼関係を築きながら、村と住民の状況を把握していきました。

1年目終盤から活動の1つとして取り組んだのが、ゴミ問題の改善です。任地ではゴミをゴミ箱に捨てる習慣はなく、ゴミ収集の仕組みやゴミ処理施設もありません。ゴミが散乱する村の状況に、住民からも「きれいにしたい」と改善を望む声がありました。

最初に行ったのが、村長を始めとする村の有力者を集めた勉強会です。私からゴミの悪影響や近隣市村のゴミ問題への取り組みを紹介し、ゴミ拾いなどの「お金がなくても今すぐできる改善行動はある」ことを伝えつつ、問題にどう取り組むかは住民である出席者に考えてもらいました。しかし、話し合い後に出席者が望んだのは、ゴミ収集所の建設などの大がかりなプロジェクト。すぐに実施できるものではなく活動は停滞します。私は有力者へのアプローチをいったんやめ、学校など地域の人々への啓発活動を行いました。しかし、ここでもゴミ拾いなど習慣にないものを実施してもらうことは難しく、行動変容は起こせませんでした。

ところで任地では、年に1回大きな会議が開催されます。村で何かを決めるには、この会議で取り上げてもらい、村全体の意思で決定してもらうことが必要です。そのため、これを次の目標にして、有力者へのアプローチを再開。話し合いを通して、私の思いに共感してくれる人も少しずつ出てきました。そして任期終了半年前、この会議で「定期的なゴミ拾いの実施」が決まりました。しかしその後、「ゴミ拾い運動」の日になっても、参加者は私1人という状況が続きました。会議で承認されても、住民の理解や同意は得られていなかったのです。

任期終了まで残り2カ月。活動を動かしたのは村長のゴミ問題への意識の変化でした。村長と活動以外でもコミュニケーションを重ねたことで信頼関係を築けたことが変化の一因となりました。村長が話し合いの場を設け「このまま問題改善に取り組まなければ村はどうなってしまうのか」と切々と訴えてくれたおかげでゴミ拾い運動への機運が一気にアップ。活動は最後に急展開を見せました。C

活動終盤、朝から半日がかりで村のゴミ拾いを実施し、終了後に集会が開かれたときの様子。中心で話をしているのが村長。最初の頃は、「ゴミ収集所をつくりたい」「ゴミ収集用の三輪車を購入しないと」などと希望していた村長だが、この頃には「村の未来のためにも、自分たちで村をきれいにしなくては」と語り、住民たちを指導するようになっていた

PROFILE

1986年生まれ、千葉県出身。2005年に津田塾大学学芸学部国際関係学科を卒業後、書店に入社。本部にて専門書の仕入れなどを約2年半担当。その後店舗に異動し、約5年間、店舗運営業務に従事した。退職し、17年9月、青年海外協力隊員としてベナンに赴任。19年9月に帰国。

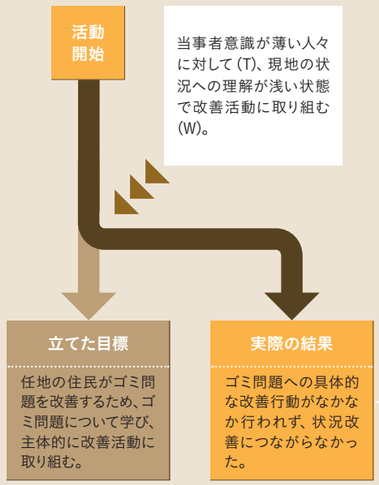
活動概要

農村部にて、特に保健分野の生活改善につながる活動を住民が主体となって行うために、主に以下の活動に取り組む。

●学校や地域での保健啓発活動
●ゴミ問題の改善　など

“失敗”から学ぶ #182

事例整理



【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員の強み（S）】ゴミ問題の知識。さまざまな立場の住民と話ができる。	【隊員の弱み（W）】現地の状況への理解が浅い。
外部	【環境の良い面（O）】村をきれいにしたいと思っている。	【環境の悪い面（T）】村をきれいにするのは自分たちであるという意識が希薄。

隊員自身の振り返り

活動を始めて、住民との常識や習慣、価値観の違いに気づくことが多くありました。最初はそれを理解せずにゴミ問題について話していたため、伝えたいことを効果的に伝えられていなかったのです。気づくたびに伝え方を改めることで、理解してもらえることが増えてきました。しかし、だからといって住民の行動が変わり、状況が改善されたわけではありません。結局、活動を大きく動かしたのは、村長の意識の変化でした。優れたトップと組織を持つコミュニティで、外部者が果たせる役割は限定的だと知りました。状況を改善させるために私ができることは何かを良く見極め、必要なアプローチを取ることが大切だったと思います。

他隊員の分析

現地のリーダー、住民の理解なくして改善なし

私も配属先との話し合いでゴミ拾い活動を決定後、1人きりでゴミ拾いをしたことがあります。しかしこれは、現地の人がその必要性を本当に理解して決定したことではなかったからでした。今回の事例で、住民から改善を望む声や有力者との会議でプロジェクトの提案がありましたが、もしかしたら両方とも「誰かがやってくれる」という期待があったのかもしれません。現地の人の力量（金銭面や人材面）について話した合った上で、彼ら自身が本当はどうしたいのかということを話し合って導き出せるとよかったのではないかと思います。

文＝協力隊経験者
- 大洋州・環境教育・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

環境省の地方支所に配属され、学校での環境教育や先生たちを対象にしたワークショップの実施、コミュニティを巡回してゴミ収集システム導入の提案などを行う。リサイクルの難しい小さな島国だったため、ゴミは資源にもなる可能性について具体的事例を踏まえて伝え続けた。

コミュニティ内の力関係を知り、つなぐ

コミュニティの中で理解を得るには、事例の村長のようなキーパーソンを味方にするのが近道と思います。しかし、見つけることは容易ではないはず。私は配属先でキーパーソンを見つけられなかったので、トップダウンの傾向が強い状況を利用しました。トップが命令を出したら、命令される側の声を私が吸い上げて課題を見つけ、それをトップに伝えて解決しました。どちらにも属さない隊員という立場だからこそ、両者の意見を聞いて伝えるという橋渡しができたのだと思います。それにより信頼関係を築いた結果、取り組みたい活動に着手できました。

文＝協力隊経験者
- アフリカ・環境教育・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

首都の大学に配属となり、大学内のリサイクルシステムの整備・運用、環境教育のワークショップなどを行った。また、地域の小学校などでも環境教育のワークショップを行うなど環境啓発に努めた。

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

希少職種図鑑

#C221

畜産・乳製品加工

派遣中▶0人
累計▶17人
分類▶農林水産
活動例▶乳製品の加工技術・品質の向上、衛生管理、新商品の開発　など
類似職種▶食品加工、農産物加工、家畜飼育

※人数は、2020年5月31日現在。

農家を対象にした乳製品製造の講習会の参加者（前列左が中西さん）。中西さんは、ヨーグルト以外に、暑い地域ではアイスクリーム、寒い地域では保存が可能な熟成チーズなど、地域によって適した乳製品を紹介して回った

PROFILE

1988年生まれ、岐阜県出身。2011年、多摩美術大学情報デザイン学科を卒業後、東日本大震災をきっかけに食の重要さを実感し、北海道や長野の牧場で勤務。主にナチュラルチーズなどの乳製品製造を担当する。16年に退職後、青年海外協力隊員としてブータンに赴任。18年7月に帰国。現在、千葉県のサスティナブルファーム&パーク「KURKKU FIELDS」に就職し、酪農と乳製品製造業に従事。

活動概要

ブータン国立乳製品研究所に配属され、生乳業者や農家に向け、乳製品加工技術の普及と向上のため次の活動を行う。
●乳製品の製造トレーニング、新しい加工品の紹介、品質管理の指導、技術力向上の支援
●乳製品の規格化と改良
●乳製品のポスター、パッケージデザインの開発など

話
中西友香（なかにしゆか）さん
（ブータン・2016年度1次隊）

Q メインの活動は？

赴任時は、ちょうどブータンでヨーグルトが流行し始めた頃でした。首都でヨーグルトを買うことは可能でしたが、その他の地域ではまだメジャーな食べ物ではなかったので、国内のさまざまな地方に行ってヨーグルトの普及をすることが主な活動になりました。農家では1～2頭の乳牛を飼育し、自分の家で消費しきれない分を多数の農家で集めて販売する仕組みができています。比較的簡単につくれ、健康にも良いとされるヨーグルトは、ブータン人に意欲的に受け入れてもらえました。村のみんなで協力して製造し、消費する姿が印象的でした。ただ、農家は乳牛の飼育や衛生管理に関する意識が低く、一方で農家には昔からやってきた方法があります。派遣期間だけでそういった意識を変えるのは難しいと感じていました。

Q 活動の最大の困難は？

宗教的に殺生を嫌うので、雄牛や老牛、病弱な牛も屠殺（とさつ）はせずに野に放ったり、継続して飼育したりします。同国では毎年口蹄疫（こうていえき）という牛の伝染病が10件以上発見されていますが、屠殺が行えないのでその被害をなくすことは困難でした。日本での常識と全く違っても、国柄を否定することはできないため、被害をただ見ていることしかできないのが不甲斐なかったです。

Q どう乗り越えましたか？

同僚には留学経験や畜産系の資格を持つ方が多数いたので、他国と自国の違いを体験している方とコミュニケーションをとり、ブータンらしさを守りつつ改善する道はないか議論したことがとても有意義でした。議論により改善できたわけではありませんが、私自身の意識も変わり、日本で取り入れたいと思うブータンの手法も多数ありました。お互いの国の良さを認め合うことで乗り越えました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

何かを相談したいとき、同職種の同期はおらず、先輩隊員にも辿りつけませんでしたが、「家畜飼育」や「農産物加工」の方に相談ができました。ブータンの乳牛は日本では見たことのない品種で、乳質も全く違うので、私の知る方法でチーズをつくってもうまくいかず、農家向けのトレーニング中に指導者なのに失敗したこともありました。戸惑うこともありますが、それを面白がり探求すると、自分の身になり、派遣国の人にも喜ばれると思います。

開発途上国では日本のように乳等*省令が定まっていない国も多いかと思います。消費者の健康を守り衛生を管理するためにも、長期戦と思って根気よく少しずつでもできる改善に取り組んでいくのが大切だと思います。C

＊乳等省令…乳及び乳製品の成分規格等に関する省令の略称。食品衛生法に基づいて厚生労働省が発する命令のひとつ。

#E102

再生可能・省エネルギー

派遣中▶4人
累計▶19人
分類▶エネルギー
活動例▶再生可能エネルギーや省エネルギーについての技術の紹介　など
類似職種▶電力

※人数は、2020年5月31日現在。

太陽光発電設備の実習の様子。再生可能エネルギーには太陽光、風力、水力、地熱、バイオマスなどがある。セントビンセントは、人口約11万人、国面積は400平方キロメートル（東京都23区総面積の約3分の2）にも満たない。発電量の一部は水力発電だが、大部分はディーゼル燃料を使用した火力発電で、交通用のガソリンなどすべての石油燃料は輸入で賄われている

PROFILE

1988年生まれ、福島県出身。2010年、明治大学商学部を卒業後、米国に1年間語学留学。日本に帰国後、電気設備設計・施工管理会社に入社後、太陽光発電設備の設計及び申請業務に携わる。17年3月、青年海外協力隊員としてセントビンセントに赴任。19年3月帰国。現在は、在トリニダード・トバゴ日本国大使館にて草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委嘱員として、兼轄8カ国を含む計9カ国の草の根無償実施に携わっている。

活動概要

セントビンセント及びグレナディーン諸島短期大学において、再生可能エネルギー人材の育成を目指し、以下の活動を行う。
●再生可能エネルギーの知識向上支援
●座学・実技を通じた太陽光発電設備技術の教育促進

話
吉田雪絵（よしだゆきえ）さん（セントビンセント・2016年度4次隊）

Q メインの活動は？

セントビンセントにある短期大学の工学部に配属され、主に電気科の2年生を対象に、太陽光発電設備の基礎教育、実習を行いました。同国は小さな島国で、天然資源もなく、石油による発電に依存しており、電気代は日本の倍近くになります。そのため、再生可能エネルギーの導入拡大に向け、その知見を持った人材の育成が急務でした。確保できる授業時間は各年で最大60時間でしたが、ハリケーンの時期などは、休校になることも多く、実際に授業ができたのは40～50時間。生徒に知ってほしいことや、やりたい内容の半分ほどしかできなかった気がします。それでも、学校や生徒の協力や手助けがあって、なんとか授業をやり通すことができました。

Q 活動の最大の困難は？

配属当初は、先生のアシスタントとして、授業内容の改善、実習などで使用する機材の作成などを行う予定でしたが、急な担当教員の離任により、私が授業運営をすることになりました。「先生」になるのは初めてで、何から始めていいのかもわからず、とても焦りました。課題作成、実習計画、試験作成、授業運営とやることに追われて、特に1年目は、生徒がちゃんと理解できているのかといったことにあまり時間を割けず、迷走していました。

それに加え、同国の特徴のある英語に圧倒され、特に生徒たちは話すスピードも速いことから、最初は質問内容がわからないことも多かったです。

Q どう乗り越えましたか？

生徒と共有する時間を増やすようにしました。日本のアニメに興味のある生徒は多いので、簡単な日本語を教えたり、雑談をしたりする時間を持つようにしました。それにより先生と生徒よりもより「友達」に近い関係性となり、授業中だけでなく空き時間などに質問に来る機会が増え、授業が活性化された気がします。そのおかげで、試験結果や実習レポートを見ても、1年目に比べると2年目の生徒のほうが授業内容の理解度が上がりました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

エネルギー分野は、ほかの職種と比べると、隊員に求められる内容や解決すべき課題の内容が明確なものが多いです。一方で、分野的に事業規模が大きく、国の政策に大きくかかわるものであるため、制約が多いといった難点はあるかと思います。しかし、利用できるスキームが比較的多く、草の根・人間の安全保障無償資金協力や国際機関と共同するなど活動の幅を広げれば広げるほど、より充実した活動を行えると思います。C

JICA Volunteers'
before ▸ after 人生を変えた2年間

before
大学生

↓

after
東京消防庁 消防官

消防署で訓練をする現在の大庭さん。訓練を積むことが、安全かつ迅速な救出・救護活動につながる。
火災現場で炎の中に入るときは、2人1組で進入し、煙で前が見えない中で要救助者を捜す

人を助けられる人間に

パラオ・野球・2015年度1次隊 大庭良介（おおばりょうすけ）さん

東京消防庁の消防官として働く大庭さんが消防官を志したきっかけは、野球隊員として派遣されたパラオで火事に遭遇したことだった。帰国後、東京消防庁採用試験を受験し、現在は練馬消防署で消防官として働いている。

パラオ野球の輝きを取り戻す

小学1年生のときに野球を始めた大庭さん。その後、体育大学に進学し、野球部に所属。将来も野球にかかわっていきたいと思っていた。そんなとき、大学で元野球隊員の先輩に出会う。

「先輩は派遣国の野球代表チームの打撃コーチとして活躍した方。自分自身をしっかり持った落ち着いた方で、協力隊に参加すれば彼みたいになれるのかと思い、応募しました」

合格した大庭さんはパラオオリンピック協会・野球連盟に配属され、代表チームの野球技術の向上などに携わることになった。パラオ野球の歴史は古く、照明付き球場があり道具も揃っていた。しかし、球場は整備されず、ゴミが散乱している状態。野球をする上で、整備や掃除を選手が行うのは当たり前だと思っていた大庭さんは驚き、「なぜ整備をしないの?」と代表選手に尋ねた。「整備して野球がうまくなるの?」と返された。

同国で人気がある野球だが、最近陰りが見える。理由のひとつは選手の心にある「驕り」だと大庭さんは思った。パラオは太平洋島しょ国[*1]の中では野球強豪国。選手は現状に満足し、発展を目指す様子は伺えない。このままではパラオ野球は衰退してしまう……大庭さんはそれを食い止める方法を考えた。

「日本野球の強さの一端には、野球ができる環境への感謝と敬意、地道な努力があると思っています。それらを身につける方法のひとつが球場整備です。整備のやり方を伝えるなかで選手の心が変化し、パラオ野球が輝きを取り戻してくれればと思いました」

グラウンドを平らにすれば怪我が防げ、プレーがしやすくなるなどの意義を説明し、毎練習後に選手と整備を開始。技術力向上に直結しない活動に選手は嫌そうだったが、日本では当然のことなのでいずれ意義を理解すると思った。だが、何カ月経っても自発的には行わない。大庭さんはなぜやらないのか理解できず、信頼関係が築けないまま時が過ぎた。

転機は任期終盤。少年野球チームのコーチを務めたときだ。初心者ばかりで技術レベルは低かったが、やる気と素直さは1番だった。「どうすればうまくなれる?」と聞く少年たちに、大庭さんも真摯に答えた。指導を聞いた子がうまくなり、その子を真似して別の子もうまくなる。「良介の真似をすればうまくなるんだ」と、球場整備も始めた。

パラオの子どもたちに野球を教える隊員時代の大庭さん。若い世代が野球に触れる機会が減ったことも野球人気が下がる理由のひとつだと考え、大庭さんは普及活動にも取り組んだ

「理解や信頼をされたかったら、まず自分が相手を理解し、信用する必要があると気づきました。代表選手への伝え方は私が未熟だった。それに気づいたことで、野球指導や自分自身を客観的に見られるようになったと思います」

帰国直前、大庭さんが不在の練習日。少年たちが球場整備をしていたと他隊員に教えられた。「彼らが大人になったとき、パラオ野球は輝きを取り戻すかもしれない」と感じた。

一歩引いた目で現状を考える

帰国後の進路について考えたのは帰国の半年前、パラオで火事に遭遇したときのことだ。黒煙があがる火災現場には40分経っても消防隊が到着しない。できることはないのかと思ったが、手伝う勇気はなく、こんなときに何かができる人間になりたいと思った。また、消防隊の到着の遅さに開発途上国の火災対応が気にかかった。日本が行う支援がないかと調べると、東京消防庁が海外の消防組織に日本の防災知識や技術を発信していると知る。緊急時に人を助けられ、途上国でも役立てる仕事。消防官を目指そうと決めた。

帰国後、アルバイトをしながら予備校に通い、東京消防庁採用試験を受験。合格し、昨年2月に東京消防庁に入庁した。消防学校で学んだ後、練馬消防署に配属され、現在は「ポンプ隊」の任務に就いている。ポンプ隊は、主に火災現場での消火・救助活動を担うほか、救急隊と連携した救急活動も行う。外国人が倒れている現場で容態を確認する際、大庭さんの語学力が役立ったこともあるそうだ。それ以外にも、消防法に基づいた立入検査や地域の防災訓練指導などの業務に携わる。

「大学生のときは監督の指示を即実行してしまう『せかせかした人間』だったんです。今は指示を受けたとき実行する前に優先順位を考えるなど、一歩引いた目を持って業務を精査できるようになった。パラオで客観的に物事を見る大切さを学んだからだと思います」

いつか国際業務の仕事や英語対応救急隊[*2]を担当してみたいという希望はあるが、今はポンプ隊の任務にやりがいを覚えている。

「日々の訓練により現場でスムーズに動けるようになるなど、少しずつ自分の成長を感じられることが増えてきています。とはいえ、まだまだ学ぶことばかり。今は目の前にある仕事に全力を尽くしていきたいです」 C

＊1 太平洋島しょ国…太平洋の島国のことで、パラオをはじめ、パプアニューギニア、フィジー、サモアなど14カ国を指す。東ティモールやニュージランドは含まれない。

＊2 英語対応救急隊…救急活動に必要な英語能力、外国の生活習慣などに応じた接遇等の技術を備えた救急隊員。

大庭さんのプロフィール

消防官・大庭さんのある勤務日
（交替勤務制8:30〜翌8:40）

8:30	勤務開始。 前日の勤務員から引き継ぎ。 すべての機械を動かして点検。 報告書作成などの事務処理。
12:00	昼食。 訓練を実施。 建物の検査。 地域の防災訓練の指導。
17:30	夕食。
18:00	車の点検。 ミーティング。 情報共有と報告書の作成などの事務処理。 訓練を実施。 仮眠。
6:00	起床。 庁舎と車の清掃。
8:40	勤務終了。

1992 **神奈川県出身。**

before

2015 3月、日本体育大学を卒業。

JICA Volunteer

2017 **7月、青年海外協力隊に参加**
パラオオリンピック協会・野球連盟に配属され、パラオ代表チームの指導や、青少年の野球チームへの指導を行う。日本人野球チームも結成し、プレーを通して野球技術や理念を伝える活動も行った。

1月、火事に遭遇。
6月、帰国。
9月、アルバイトと予備校に通う生活。

東京消防庁に国際業務の仕事があることを知り、受験を決める。

野球隊員だった先輩への憧れに加え、「人生80年」と考えたとき、行ける環境にいるなら海外に行かないのはもったいないと思い、参加した。

after

2018 8月、東京消防庁採用試験に合格。

2019 **2月、東京消防庁に入庁。**
消防学校で学ぶ（6カ月間）
8月、練馬消防署に配属され、ポンプ隊として活動。

帰国後よもやま話

第17回 自動車整備隊員篇

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。

［座談会参加者］

A さん（男性）

【派遣前】
自動車ディーラー勤務
（自動車整備士）
【協力隊】
▶退職参加
▶・自動車整備
・アジア
・2014 年度派遣
▶大学の自動車整備科で授業のレベルアップを支援
【現在】
自動車整備専門学校の教員

B さん（男性）

【派遣前】
自動車ディーラー勤務
（自動車整備士）
【協力隊】
▶退職参加
▶・自動車整備
・大洋州
・2015 年度派遣
▶職業訓練校の自動車整備科で授業のレベルアップを支援
【現在】
外食事業会社勤務
（マーケティング担当）

C さん（男性）

【派遣前】
自動車メーカー勤務
（開発職）
【協力隊】
▶現職参加
▶・自動車整備
・アフリカ
・2015 年度派遣
▶職業訓練校の自動車整備科で授業のレベルアップを支援
【現在】
復職

A 派遣前の職は自動車ディーラーの整備士です。協力隊では、大学の工学部の自動車整備科で、教員と学生のスキルアップ支援に取り組みました。帰国後は自動車整備専門学校の教員となり、現在に至ります。

B 派遣前は私も自動車ディーラーの整備士として働いていました。協力隊時代の配属先は職業訓練校で、ハイブリッドカーの整備技術を教えるカリキュラムの立ち上げなどに取り組みました。帰国後はまず、欧州に本社を置くコンサルティング会社の東京支社に就職し、「AI」などの活用に関するコンサルティングに携わりました。その後、実家に戻らなければならない事情があったため、地元にある外食事業会社に転職しました。現在はそこでマーケティングに携わっています。

C 私はお二方と違い、派遣前の職は自動車整備士ではなく、自動車メーカーでエンジンの開発に携わっていました。協力隊は現職参加で、職業訓練校の教員として、自動車整備技術や自動車整備に必要な数学の指導をしました。帰国後は元の職場に復職し、現在もエンジンの開発に携わっています。

帰国後の進路の選択

B 私は帰国の時期に母校の自動車大学校から「教員として戻ってこないか」と声をかけられたのですが、違う道に進むことを決めていたので辞退しました。Aさんはどのような理由で教職に就かれたのでしょうか。

A 帰国の時点では、まだ明確に進路を決めていなかったのですが、協力隊で初めて「教員」を経験し、そのおもしろさを感じていたので、教員の道は漠然と頭にありました。「学校」にはカリキュラムがあるので、私自身の知識があやふやな事柄も教えなければならない。そうして授業のために勉強すると、自動車整備士としての経験があるため、学生時代よりもよく理解でき、そこで新たなスキルアップが実感できる。それは、自分が慣れている作業ばかりを後輩に教えていた自動車整備士時代にはなかったものでした。教員になったのは帰国の10カ月後ですが、そのきっかけは、知人に今のポストの求人情報を教えてもらったことです。

教員となって意外だったのは、途上国で自動車整備技術の指導に携わった経験が、技術の進んだ日本でそれを指導する際にも役立つということです。日本の自動車整備の現場は、「部品の修理」ではなく、「部品の交換」がメインとなっています。調子が悪くなったら、取り換える。一方、私の派遣国では、部品を買うお金を抑えるために、電装品なども分解して修理の可能性を探ります。日本では、自動車整備の学校でそうした部品を分解し、内部の仕組みを学ぶことをしますが、自動車整備の現場に入ってからはそれをすることがないので、知識はあいまいになっていく。私は派遣国で何度も「分解」の現場を経験したため、今、そうした実習では自信を持って学生を指導することができています。

C 私は学生時代にNGOが主催する東南アジアでのワークキャンプに参加しており、協力隊に参加したのも「直接人のためになる仕事をしたい」という思いからでした。そのため、現職参加をせず、帰国後に派遣前と違う職に就くことも考えたのですが、生活の安定を優先して現職参加しました。Bさんの大胆な転職はうらやましいと感じるのですが、どのような動機での転職だったのでしょうか。

＊ 電装品…充電装置や点火装置など、電気がかかわる部品の総称。

B 私も、途上国で医療支援を行うNGOの方の講演を高校時代に聞いて抱くようになった「人のためになる仕事をしたい」という思いが、協力隊参加の動機でした。そもそも自動車整備士になったのも、そうした思いを実現する手段として協力隊に参加するために、手に職を付けるのが目的でした。

帰国後の転職も、「人のためになる仕事をしたい」という思いが元となっています。協力隊時代、私の派遣国を大きな台風が襲いました。その際、電気が通っていないがゆえに医療施設の機能がストップし、住民が危険な状態に置かれてしまう現場を目の当たりにしました。その経験から、派遣国にソーラーパネルを普及させるビジネスにいずれ挑戦したいと考えるようになりました。帰国後の転職は、「マーケティング」などビジネスについて学ぶことが目的です。就職先は、せっかくなら海外経験を生かせる所にしようと考えて選びました。現在の勤務先は、海外に拠点があるレストランのチェーン店を日本で経営している会社であり、英語でのミーティングも多いため、協力隊で身に付けた英語力が非常に役立っています。

「1人の人間」として働く姿勢

C 私も、現在携わっている仕事では、海外の事業体、しかも私が派遣されていたアフリカの事業体とのやりとりが多いので、やはり協力隊時代に身に付けた英語力や、アフリカの方々と付き合う力は役立っています。しかし、もっと根本的な仕事に必要な力が、協力隊経験によって養われたという実感があります。それは、「自立」とでも言うべき力です。私の任地は農村部で、そこで暮らす日本人は私1人でした。長い間、日本人と会わない生活が続くと、次第に「『1人の日本人』としてどう振舞うべきか」という意識が薄れ、「『1人の人間』としてどう振舞うべきか」を自問自答しながら生活を送るようになっていきました。そうして帰国し、復職すると、派遣前のように「会社」や「所属するチーム」の傘の下に隠れながら仕事をするのではなく、自分を曝け出し、周囲に「1人の人間」として丸ごと評価してもらいながら仕事をすることができるようになったのではないかと感じています。

B 「『1人の人間』としてどう振舞うべきか」を考えるようになるというのは、私も経験しています。赴任した当初は、「日本人として、日本の技術を伝えなければ」という気持ちが強かった。しかし、頻繁に停電が発生し、その間は授業がストップしてしまうなど、日本の技術を伝えようと思ってもそう簡単には実現できず、停電中はガスが使えた配属先の料理科の教室で、学生時代のアルバイトでマスターしたフランス料理やイタリア料理を学生に指導したりするようになりました。そうして学生たちとの距離が縮まるにつれ、「日本人として」ではなく、「1人の人間」として、自分に責任を持ちながら生きることの大切さが理解できるようになったのでした。

今後のビジョン

C 先ほどお話ししたように、私は「直接人のためになる仕事をしたい」という思いがあります。現在の仕事も人のためになっているとは思いますが、それをもっと実感できるような仕事がしたいと思っています。お二方は今後についてどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

A 私は授業で派遣国の自動車整備の状況を伝えたりするのですが、まだ日本の現場を経験していない学生たちは、日本との違いがわからないことから、興味は薄いようです。しかし、日本の現場を知る同僚の教員たちは、私の協力隊時代の経験に興味を持ってくださる。そうした点で、私が今の勤務先で教員を務める意義も少なくないと感じられるので、しばらくは今の勤務先で私にできる限りのことをやっていこうと思っています。

勤務先では今、ネパールやベトナム、スリランカなど外国からの留学生が多くなっています。日本の自動車整備士業界は人手不足が進んでおり、勤務先の留学生が自動車整備士として日本の自動車メーカーなどに就職する例も増えています。しかし、留学生にとって、日本語の教科書を使って勉強するというのは容易ではない。そうしたなか、勉強と生活の両面で彼らのフォローをすることは、海外で生活した経験を持つ私のような教員こそすべきことだと思っています。現在、勤務先では外国人をもっぱらの対象とする「国際自動車整備科」の新設も検討しており、それが実現したら、そこで私も何かしらの力になれたらと思っています。

B 私の地元には、東京オリンピックの新種目にもなった3人制バスケットボールのチームがあり、今、そのマーケティングの仕事をしないかとの誘いをいただいています。私はそうしたチャンスを生かしてビジネスの経験をさらに蓄えていきつつ、先ほどお話しした「協力隊時代の派遣国にソーラーパネルを普及させるビジネスに挑戦する」という目標を達成できたらと考えています。

C

Pick Up OB·OG会

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

日本も元気にする青年海外協力隊OB会

日本で「地域づくり」などの社会貢献活動に取り組む協力隊経験者を中心メンバーとする当会。2016年の発足以来、活動の柱となっているのは、それぞれが取り組む社会貢献活動に関して情報交換や議論を行う催しだ。その1つが、メンバーの活動現場を訪ね、その様子を見学したり、関係者の話を聞いたりする「OBを訪ねる旅」というスタディツアー。これまで、徳島県や群馬県などをフィールドに6回にわたって実施してきた。もう1つは、「地域で活動する青年海外協力隊OBOGのつどい」という勉強会。例年、首都圏に集まって開催してきたが、今年はコロナ禍を受け、初めてオンラインで実施した。

当会ではこのほか、帰国したばかりの協力隊経験者などを対象に、メンバーが帰国後の活動について発表する報告会を開催。メンバー以外の協力隊経験者たちへの情報提供にも力を入れている。

当会の特徴は、さまざまな地域や業種で社会貢献活動に取り組む協力隊経験者がメンバーとなっている点だ。それによって得られる視野の広がりが、メンバーにとって活動アイデアの源泉となっている。

「地域で活動したい、あるいはしている協力隊経験者が、それぞれの活動に関する情報共有や意見交換を行えるプラットフォームを構築していきたいと考えています。協力隊経験者の皆様には、活動の活性化や課題解決のために当会を活用していただければと思います」（河内代表）

今年5月に実施した、オンラインの「地域で活動する青年海外協力隊OBOGのつどい」。全国各地のメンバー約50人が参加した

会の目的

1. 地域づくりやまちづくりなどの社会貢献活動を行っている協力隊経験者など（以下、協力隊経験者）のネットワークを構築することで、互いの情報交換を促進し、それぞれの活動の活性化を図るとともに、活動の連携・協働や発展を促進することで、社会貢献に寄与する。
2. 協力隊経験者の活動と地域や企業の活動をつなげることで、地域に根差した協力隊経験者の活動を促進するとともに、協力隊員や協力隊経験者の活動に対する地域の理解を促進する。
3. 協力隊経験者の活動を広く社会に周知することで、協力隊の認知度を上げ、参加促進につなげるとともに、帰国した協力隊員が活躍しやすい社会づくりに寄与する。
4. 上記活動を通じて、広く社会の国際理解を促進する。

Outline

正式名称	日本も元気にする青年海外協力隊OB会
設立時期	2016年1月
法人格	任意団体

Organization

代表者	河内 毅 （グアテマラ・森林経営・2002年度1次隊）
会員数	116人
入会資格	会の目的（上記）に賛同する、原則として協力隊に参加した人、もしくは会の目的ならびにミッションに賛同し、会の活動を積極的に支援・応援しようとする人
会費	無料

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年5月に開催
役員会の頻度	月に1回程度開催
会員・役員間の連絡手段	オンラインが中心

Contact

問い合わせ窓口	❶nippon.genki.jocv@gmail.com ❷https://www.facebook.com/nippon.genki.jocv/ ❸https://blog.canpan.info/nippon-genki-jocv/
情報発信の手段	同上

協力隊ケニアOB・OG会

2019年の「グローバルフェスタJAPAN」に出展したブース。マサイ衣装を体験してもらうコーナーが好評だった

1966年以来、延べ1700人を超える協力隊員が派遣されてきたケニア。その有志で構成する当会が、ケニアへの派遣開始50周年を期して発足したのは2016年で、現在登録されているメンバー約500人の世代は広範だ。

これまでに、協力隊のOB・OG会が一斉にブースを出展する「協力隊まつり」や、日本最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN」に参加するなど、主にケニアでの経験を日本に伝える活動に取り組んできた。さらに、昨年は協力隊の派遣前訓練で自主講座を開催し、ケニアに派遣される協力隊候補生への情報支援も行った。

現在は、郷友組織の在日ケニア人会とも関係を構築。同会が開くイベントに参加したり、反対に「協力隊まつり」に同会のメンバーに参加してもらうなど、「Face to Face」の交流が始まっている。今後はさらに、在日ケニア人会のメンバーとの「ビジネスマッチング」を進め、同国の経済発展に寄与することも目指している。

「幅広い世代がメンバーとなっているのが当会の特徴だと思います。そのため、自分が知らない時代のケニアについて知りたいという方には、ぜひ当会のメンバーに加わっていただければと思います。日本には、陸上競技やサッカーなど、スポーツの世界で活躍しているケニア人が多くいます。今後は、彼らとの交流も実現していければと考えています」（倉科代表）

会の目的

1. 協力隊経験者間の連携、交流を深め、発展させる場を提供する。
2. ケニアと日本の友好を深めるための活動を推進する。
3. ケニアでの経験を日本および世界に還元する活動を支援する。

Outline

正式名称	協力隊ケニアOB・OG会
設立時期	2016年3月
法人格	任意団体

Organization

代表者	倉科芳朗 （ケニア・理数科教師・1988年度2次隊）
会員数	495人
入会資格	協力隊員としてケニアに派遣された人（短期派遣と長期派遣のいずれでも可）
会費	2000円／年

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年8月に開催
役員会の頻度	月に1回程度開催
会員・役員間の連絡手段	コロナ禍を期にオンライン中心に移行中

Contact

問い合わせ窓口	❶info@kenya-jocv.com ❷https://www.facebook.com/JOCVKenya ❸http://kenya-jocv.com/
情報発信の手段	同上

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単＆便利！ 活動・生活のパワーアップに役立つ

第107回

活動に役立つアイデア

手洗いの啓発活動①

ナビゲーター＝松岡由真さん（ベナン・感染症・エイズ対策・2017年度1次隊）

「正しい手の洗い方」を伝える

新型コロナウイルス感染症の拡大により、世界的に手洗いの重要性が見直されています。私たちもそうですが、日常的に正しく手が洗えている人はほとんどいません。この機会に、手洗いの正しい方法、および派遣国の方たちへの伝え方を考えてみてはどうでしょうか。

私は活動中に村や小学校でNGOと協力し、保健に係る啓発活動・授業を行っていました。私の任地は特に、子どもたちが下痢の脱水で亡くなることが多い地域でした。手洗いの啓発活動は「水と衛生」というテーマの中で行い、以下の流れで進めました。

①ハエと下痢の紙芝居

まず聴衆の興味を惹いて、衛生観念について考えてもらうために紙芝居を読みます。

紙芝居の内容と読後の問いかけ

❶男の子が友達と外で遊んだ後、手を洗わず物を食べた
❷トイレではなく外で排泄した
❸女の子が食べかけの食べ物にフタをしていなかった
❹女の子が下痢をした後、手を洗わずにお母さんの料理の準備を手伝った
❺料理に使う食材もちゃんと洗われていなかった

このことが原因で最終的に家族全員が下痢で苦しんでしまう物語です。絵にはハエがばい菌を媒介する様子も描かれています。

この物語を読んだ後に、聴衆に「登場人物は何をすべきだったか」「何が悪かったのか」を問いかけ、「食べかけのものにはフタをする、布をかぶせる」「水がめにはフタをする」「手洗いをしっかりする」「食事の準備の際は食べ物、食器などをよく洗う」……というように、生活の中で衛生への配慮がされているかを考えてもらいます。

②ばい菌とハエの動き

模造紙に描いた絵を用いて、排泄物のばい菌がどのように体内に入るか、またハエがどのように媒介するのかを説明します。

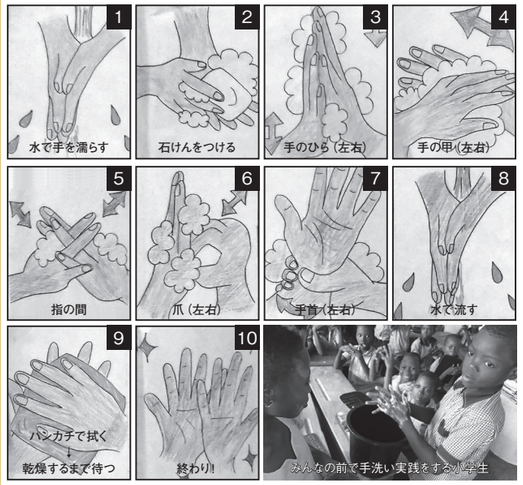
ばい菌の説明とハエによる媒介

子どもに「ばい菌」という概念の説明をするのは難しいですが、「目に見えないほど小さいけれどそこらじゅうにいて、私たちの体に入るとさまざまな病気の原因になる」と説明します。食材についたばい菌や、ハエによるばい菌は前述の紙芝居での対策を、手についたばい菌を退治するには手洗いが有効である、という説明をして次の手洗いの手順の説明へ移ります。

③手洗いの手順

模造紙に書いた絵を見ながら、手洗いの仕方を学びます。

手洗いの方法と実践



派遣国のベナンでは大人も子どもも石けんをつけた後、すぐ洗い流そうとするので、「石けんを洗い流すための手洗いではない」「石けんをつけてから手をこすって洗うことが重要だ」と強調しました。

9で「ハンカチで拭く」となっていますが、活動後半からこの絵はなくしています。国によって異なると思いますが、必ずしも手洗い直後に清潔な布で手を拭けるとは限りませんし、常に清潔なハンカチを携帯しているとも限りません。早く乾かそうとそこら辺にある布で手を拭いてしまうよりは、乾燥するまでほかのものに触らない、ということを伝えた方がよい場合があると思います。ですので私は「手を洗った後は手を組んで乾燥するまで待つ」という伝え方に変えました。

ひと通り手順を学んだあとは、聴衆の中から2人に前へ出てきてもらい、手洗いを実践してもらいます。1人は手を洗う人、もう1人は水ですすいであげる人。前で実践する人に倣って、ほかの聴衆に同じ動作をしてもらいます。

④手洗いをするのはいつ？

手洗いの手順がわかったところで、生活の中でいつ手洗いをするのかを聞きます。トイレの後、遊んだ後、動物を触った後、食べる前、料理をする前などに特に手を洗ってほしい、と伝えます。

以上で、手洗いの啓発活動は終了です。ばい菌の退治として手洗いを伝えましたが、新型コロナウイルスの感染対策にも手洗いは効果的なので、アレンジしてみてください。次号では、手洗いの啓発活動で合わせて行うと良い活動をお伝えします。

生活に役立つ技

リラックスストレッチ

ナビゲーター＝玉枝香澄さん（マラウイ・理学療法士・2014年度3次隊）

座り続けた後はストレッチですっきり！

パソコン作業などで長時間座ることが多くなっていませんか？ 「長時間座る生活様式は喫煙よりも危険だ」と言われることも。そんなときはストレッチを行うとすっきりします。「ストレッチポール」などの特別な道具がなくても大丈夫。紹介するストレッチは肩こりや腰痛の予防にも効果的です。

1 肩こりに効く、背骨伸ばしストレッチ

①バスタオルをきつめに硬く丸め、ゴムで止める。これをストレッチポールの代用品として使う。

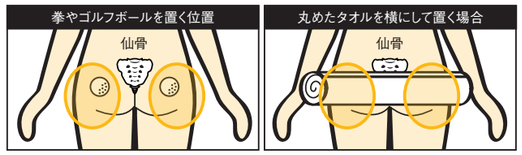
②肩甲骨の下あたりに丸めたタオルを敷いて大の字で寝る。肩を外旋させる（手のひらを上向きにすることで肩関節を開く）ことで大胸筋などのストレッチにもなる。1、2分寝るだけでも体がすっきり！

2 座りっぱなしに効く、梨状筋ほぐし

※梨状筋はお尻の奥の方にある筋肉。

①拳をつくりお尻の後ろに当てて膝を立てる。当てる場所は下図の円部分参照。

※自分の手が痛くなる場合は、ゴルフボールなどの硬いボールや、丸めたタオルを敷くことでも代用できる。



②ゆっくりと膝を外に倒す。「イタ気持ちイイ」ポイントがあるのでそこを探す。左右の1分ずつ押す。

ストレッチで姿勢の矯正と坐骨神経痛などの神経症状、腰痛、肩こりの予防になれば幸いです。

投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックをお持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。
crossroads@sojocv.or.jp

活動に役立つアイデア

身近なもので理科実験

ナビゲーター＝西川康人さん（パプアニューギニア・小学校教育・2018年度2次隊）

火を使った実験「粉塵（ふんじん）爆発」

パプアニューギニアの子どもたちが大好きな火を使った実験「粉塵爆発」を、サイエンスショーとして行いました。任地は十分な実験材料がない環境でしたが、この実験の材料は現地で安く手に入れることができました。なおかつインパクトのある実験なのでお勧めです。火を使い、火が広がる実験なので、必ず安全な環境で行ってください。

教室でただ板書を写しているだけの理科に興味のない現地の生徒に、理科を視覚的に捉えやすくする実験を体験してもらうことで、興味を持ってもらいたいと思ったのが実施のきっかけです。この実験は細かい作業を必要としないので、みんなで楽しむことができます。風や湿度の関係でうまくいかないことがあるので、風のない晴れた日に実験を行うことをお勧めします。実際、小麦粉が湿気ってうまくいかなかった経験もあります。失敗の原因を生徒たちと一緒に考えるのもいいかもしれません。

［用意するもの］
- 小麦粉
- 2～3リットルのペットボトル
- ストロー（タピオカが飲めるぐらいの太さ。画用紙を丸めたものでも代用可）
- 新聞紙
- ライター
- 水の入ったバケツ（消火用）

［粉塵爆発とは］

空気中に浮遊する細かい粉の一部に火がつくと、次々に燃焼が伝わり、一瞬にして激しく燃焼すること。粉塵爆発が起こるには条件があり「酸素の存在」「一定濃度の粉塵」「発火源」の3つ。失敗の原因を探るときはこの条件についても考えてみると良い。

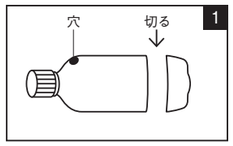
［手順］

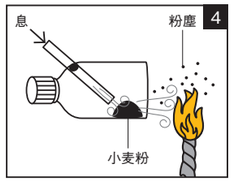
①小麦粉を一方向に吹き飛ばすため、ペットボトルの覆いをつくる。フタを閉めたペットボトルの底を切り取る。フタから3センチほどの所にタピオカドリンクのストローが通るほどの穴を開ける。

②小麦粉を❶の中に適量（大さじ1くらい）入れる。ペットボトルにストローを挿し、1人が吹く準備をする。

③数枚をまとめてねじった新聞紙に火をつけたものをもう1人（できれば教師などの大人）が持つ。やけどをしないように注意し、危ないと思ったら消火用のバケツに入れること。

④ストローを使い小麦粉に息を吹きかけて小麦粉を飛ばし、火にかける。大きな炎が上がれば成功。





［注意事項］
- 周囲に人がいない場所、また燃えるものが近くにない場所で行う。
- 息を吹く方向に人がいないことを確認してから行う。
- 子どもだけでは決して行わない。

先輩隊員たちの就職活動の記録をJICA進路相談カウンセラー・青年海外協力隊相談役とともに振り返ります。

先輩隊員の シューカツ記

勤務先：
愛媛県立今治西高等学校（地方自治体）

シューカツ START

2016年1月 帰国 1年前

教員採用試験の試験勉強と情報収集を開始

情報収集は派遣中から試験まで継続して行い、青年海外協力隊相談役、JICAの教員採用試験対策講座、教員採用試験情報誌を利用した。

1次試験（2017年度）→ 不合格
（筆記・実技・集団面接・討論）

2017年6~7月 帰国 半年後

1次試験（2018年度）（同上）

提出書類は「履歴書」「職務経歴書」「自己PR」。作成時は、自分が大切にしていることを自分の言葉で書き、そのうえで表現方法などについて相談役や知人に助言をいただいた。面接では、「保健体育の魅力」「協力隊活動」「協力隊以外のボランティア」「アルバイト経験」「野球の指導について」などを聞かれた。

GOOD POINT!
1年目と比較すると2年目は面接での回答が具体的・簡潔だったと思う。伝えたい内容に変化はなかったが、話し方や表現を改善。場慣れしたこともあり、落ち着いて答えられた。面接練習をしたこともよかったと思う。

2018年6~7月 帰国 1年半後

2次試験（小論文・場面指導・個人面接）

面接の内容は、1次試験と同じ。結論を先に言い、端的な回答を意識した。協力隊経験のことに関しては少し長くなってしまった。熱が入りすぎたかなと反省。

2018年9月 帰国 1年8カ月後

2018年10月 帰国 1年9カ月後

合格

応募した数…4府県
1次試験通過…3県
※愛媛県以外の2次試験は辞退

就職！

シューカツREVIEW
過去の経験を生かして、「今」懸命に取り組んでいること（当時は、講師やコーチとしての勤務）を評価していただいたのだと思う。

横山祐輔（よこやまゆうすけ）さん
（サモア・体育・2014年度3次隊）

出身地 愛媛県
生まれた年 1985年（帰国時の年齢：31歳）
略歴

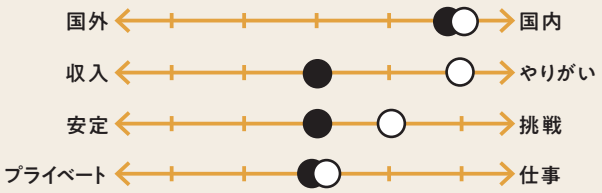
- ■2008年、中京大学体育学部卒業後、保健体育科の講師として愛媛県の高等学校に6年間勤務。
- ■2015年1月、青年海外協力隊員としてサモアに赴任。中高等学校などで体育の普及活動などに携わる。
- ■2017年1月、帰国。
- ■2018年11月から愛媛県の特別支援学校で講師として約1年半勤務。
- ■2018年10月、愛媛県の教員採用試験（高等学校・保健体育科）に合格。
- ■2019年4月、愛媛県立今治西高等学校に赴任。硬式野球部コーチ。

自己PR

強み	人一倍の努力ができること、忍耐力
弱み	民間企業での業務経験がない、取得資格が少ない
有する資格	高等学校教諭一種免許状（保健体育）
アピールできる経験	高等学校や特別支援学校での講師経験

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前＝●　協力隊参加後＝○



仕事選びで一番大切にしたことは？

高等学校の保健体育科教師になること。

就活をとおして一番苦労したことは？

教員採用試験の受験準備1年目は勉強だけでしたが、2年目は勉強と特別支援学校での勤務、高校野球部のコーチを行い、それらすべてをこなすことが大変でした。毎朝4時に起床して勉強するなど、朝の時間を大切にしていました。

協力隊経験をどう伝えましたか？

志望動機に次のような内容を書きました。「協力隊経験を通して知った、互いに支え合い、幸せな生活を共有することの大切さや喜びを生徒に伝えていきたい」。漠然とした文章であることは反省点ですが、自分自身が伝えたいことを書きました。面接で上記内容を具体的に伝えました。

青年海外協力隊相談役による シューカツの総括

宇都宮（うつのみや） 民（たみ）さん
担当地域：
愛媛・高知

横山さんは、派遣前から「愛媛で体育教師になり、野球部の指導をしたい」と明確な目標をもっていました。愛媛県教員採用試験では、協力隊などの国際貢献活動に対し100点加点（800点満点に対して）の優遇措置がとられていますが、この加点を活かせたのは、横山さんが協力隊活動に「人として成長するため」という目的をもって取り組んだからでしょう。前向きに努力し続けたことが、念願の採用試験合格につながったのだと思います。

jicaskic-cs2@jica.go.jp

●経歴：地元放送局で10年間アナウンサーとして勤務した後、フリーアナウンサーに。ラジオで協力隊員へのインタビュー番組を企画・制作し、途上国での活動で成長する隊員の様子を紹介している。現在、大学・短大等で話し方やビジネスマナー等の授業を担当。2015年より現職。

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

カザフスタンの柔道選手とメダル獲得を目指す

青年海外協力隊員としてバングラデシュで柔道指導者として活動した後、ミャンマー、中華人民共和国で柔道の指導に携わり、現在は、カザフスタン柔道体表チームのコーチを務めている千原慎太朗さん。東京2020オリンピック競技大会でのメダル獲得を目指し、選手とともに奮闘している。

カザフスタン柔道
代表チームコーチ
千原慎太朗（ちはらしんたろう）さん
（バングラデシュ・柔道
・2010年度3次隊）

柔道指導者としての一歩目は協力隊。現在カザフスタン代表チームのコーチを務める千原さんはそう話す。

海外での柔道指導者を目指すきっかけは、大学の授業の1つである海外武道実習でフランスに行ったことだ。現地の人と言葉を介さずとも柔道でわかり合えることに魅力を感じた。指導経験を積むため、卒業後に協力隊に参加し、バングラデシュ柔道代表選手の強化と柔道の普及に携わった。任期満了後、日本の柔道団体から仕事を紹介され、ミャンマーへ。ミャンマー柔道代表チームの監督として参加した東南アジア競技大会で、同国過去最多の4個の金メダルをもたらした。その実績を買われ、翌年から3年半、中国で柔道を指導。2018年よりカザフスタン代表選手のコーチを務め、海外指導歴は合計10年になる。

現在のコーチとしての仕事は主に2つ。合宿での指導と、試合への帯同だ。指導初日、選手たちは千原さんを友人のように迎えてくれたものの指導者とは見ていないようだった。千原さんは選手の練習を見て弱点を分析した後、選手と2人で練習を始めた。選手は千原さんを投げようとするが投げられない。そこで選手に投げられない理由を伝えると、選手は千原さんをコーチと認める。「指導者としての実力を最初に見せることが大事」というが、指導者としての一歩目は困難の連続だった。

バングラデシュへの派遣当初は指導の初心者だった千原さん。現場に立って指導者としての知識不足に悩んだという。

合宿中の選手たち。合宿中は、コーチと選手は相部屋。練習時間以外も一緒に過ごす

左：カザフスタン柔道代表監督（中央）と選手、コーチ　右：2019年世界柔道の東京大会で担当するカザフスタンの選手たちと千原さん（右から2人目）

「そこから独学で勉強を始めました。柔道以外に、マッサージや栄養学、運動生理学なども学びました。日本なら接骨院に行くなど、各分野の専門家を訪ねられますが、環境が整わない開発途上国ではそうはいかない。本を読み、自分の体で実践し、知識を蓄積しました」

活動中は、代表選手が練習に来ず、配属先には柔道技術の向上より金銭的支援を求められるなど、想像もしなかった状況に怒りを覚えた。一方、柔道が好きで懸命に練習する選手もいて、彼らを見ているうちに怒るより今できることは何かを考えるようになった。そんな積み重ねが現在の指導に生かされている。

カザフスタンの柔道合宿は山奥にある施設で数週間行われる。選手のポテンシャルは高いが、競技選手というには精神的に幼く、生活態度もルーズ。そこで代表監督は千原さんに合宿中の指導に加え、「選手の親になること」「精神的に自立し、自発的に練習するという日本人選手の規律やアスリートの心を伝えること」を期待していた。とはいえ、千原さんはそれらを日本の方法で伝えることはしなかった。

「多くの国で人と出会ったことで、それぞれの国民性を知ることができ、それが指導方法にも反映できるとわかりました。例えばカザフスタンの人は、プライドが高いけれど実は打たれ弱いので、褒めて伸ばすように指導します」

また、選手とは、選手としてだけではなく人としての成長も願い、できる限り話し合う。どんなチャンピオンに、どんな人間になりたいのか、と。

「私は幼い頃に柔道を始め、憧れの選手のようになるのが夢でした。指導する選手には誰かの夢となるようなチャンピオンになってほしい」

2019年世界柔道選手権東京大会では、自身が担当する中量級（81キロ級、90キロ級）の選手と来日。試合での課題を見つけ、オリンピックへ向けて指導に熱が入ってきた今年3月、新型コロナウイルス感染症の影響で練習はストップ。柔道国際大会も8月一杯まで行われない。一瞬日本への帰国も頭をよぎった。

「選手たちは柔道が好きで私もそんな彼らが好き。だから彼らを裏切れない。選手の望みを叶えるのがコーチの仕事であり、それを叶えて喜ぶ選手を見ることがやりがいなのです」

6月に練習が1度再開されたが、今後の見通しは不明。今は自宅で体づくりや柔道の知識の更新をし、本格的な練習開始を待っている。

●プロフィール：1987年生まれ、熊本県出身。2010年、国士舘大学体育学部武道学科卒業。11年1月、青年海外協力隊員としてバングラデシュに赴任。バングラデシュ柔道代表選手の強化と、柔道の普及に携わる。13年1月、帰国。ミャンマー、中華人民共和国で柔道の指導をした後、18年4月よりカザフスタン柔道選手の指導にあたる。

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ 朝ごはん

イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

朝はパンっ♪

トースターがなく、そのまま食べていたパン。派遣国ではマーガリンたっぷりの食パンが人気。朝食だけではなく、来客時も食べる。私も何斤振舞っていただいただろうか。「食パン＝派遣国の人々の温かさ」なのだ。食パンにこんなに思い入れができるとは……。そして帰国した今日も、トースターにすら感謝して、食べてしまう。

ペンネーム：ジャムおじさん さん（アフリカ・コミュニティ開発・2019年度派遣）

★ 日本大好き

派遣国は常夏の島国である。朝ごはんは新鮮なフルーツ。家族が毎日採ってくれる。お肌ぷるぷる、最高に贅沢！　採れない時期が来た。朝ごはんが変わった。白米、マグロの刺身（＋日本製の醤油）、きゅうり（＋日本製のキムチの素）、サバの塩焼き。あれ?ここは日本？　あ、日本製の即席ラーメンも出てきた。そういえば昨日のカボチャの煮物とそうめんおいしかったな。ああ、だからホームシックにならなかったのか。

ペンネーム：日本語もたくさん残っていたよ さん（大洋州・小学校教育・2019年度派遣）

★ 思い出す懐かしい味

派遣国では、ロシアから伝わる料理「カーシャ（お粥）」を朝食として食べます。お米や小麦、ソバの実などの穀物を水や牛乳で煮て食べます。朝からミルクの甘い匂いと、穀物（特にソバの実）の匂いがふんわりと香ります。お腹に優しく、栄養価も高いです。土日に家族揃って、カーシャを食べるというのが習慣になり、今では良い思い出です。

ペンネーム：カフェラテ さん（アジア・体育・2019年度派遣）

★★ 特別な日曜日

はじめてのホームステイ。普段はパン1、2個だけど、日曜日は特別なのです。パンケーキやクレープを大量につくってくれて、みんなでゆっくり食べる。おいしくて楽しい時間。のちに、外食のたびに爆盛りコッテリ料理でお腹を壊し、そうめんばかり食べるようになることを、そのときはまだ知らない。

ペンネーム:パンケーキ、また食べたい。さん（中南米・土木・2019年度派遣）

募集中のお題

「寝具」「通勤」「歯みがき」「お風呂」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきがイラストになるかも！？

一時帰国中の隊員や派遣前の隊員に対する今後の支援について

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、一時帰国した隊員や派遣前の隊員に対する支援として、令和2年度第2次補正予算に約6.1億円が計上されました。

支援内容は、「待機手当などの支給期間の拡充」「教育訓練手当の支給対象の拡大」の2点です。「待機手当などの支給期間の拡充」では、待機期間の長期化を見据え、隊員の生活保障の観点から、待機手当などの支給期間を現在の120日間から再派遣や派遣の時期まで延長し、支給します。「教育訓練手当の支給対象の拡大」では、現在のキャリア形成や進路選択を支援する観点から、派遣を断念せざるを得ない方に対し、現在任期満了者のみに給付している教育訓練手当を支給します。教育訓練手当については以下のウェブサイトをご覧ください。なお、厚生労働省が実施する「教育訓練給付制度」への申請が可能な場合は、この制度に申請願います。

▶JICA海外協力隊ウェブサイト「教育訓練手当」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/allowance/

帰国後の社会貢献活動や進学への支援の紹介

一般社団法人協力隊を育てる会では、協力隊活動を終了後、さらなる飛躍と社会への貢献を目指して活動・進学する隊員のために、活動資金などを支援する事業を行っています。2020年度は7月1日から8月31日まで同事業への応募を受け付けています。支援事業の1つ「帰国隊員/青年支援プロジェクト」では、協力隊の経験を生かして国内外で開発途上国に貢献する活動や、その活動を行うための調査・研究にかかる必要な経費の一部を支援しています。またもう1つの、「馬場医療・福祉奨学金」制度では、医療・福祉分野で修学する方を対象に、経済的支援を行います（返還義務あり）。支援対象や応募資格、募集期間など、詳細は以下のウェブサイトをご覧ください。

▶協力隊を育てる会ウェブサイト「帰国隊員への支援」
https://www.sojocv.or.jp/mbr_support/homecoming/

コンピュータ技術職種隊員を対象にしたオンラインセミナーを開催

一時帰国中のコンピュータ技術職種隊員を対象としたIT分野のキャリア形成支援と意見交換を行うオンラインセミナーを6月11日に開催しました。このセミナーに、8人の隊員とIT分野の2人のJICA専門家（協力隊経験者）、JICA海外協力隊技術顧問、協力隊事務局職員などが参加しました。第1部は「ＩＴ分野での国際協力のキャリア形成について」をテーマに、IT分野の2人のJICA専門家が発表。第2部は「参加者間の情報共有・意見交換」として、派遣国に対する遠隔支援事例などについての情報交換を行いました。合計2時間のセミナーでは、参加者間の活発な情報・意見交換がありました。

コミュニティ開発隊員を対象にしたオンライン勉強会を開催

一時帰国中のコミュニティ開発隊員を対象として、オンラインの隊次別座談会および隊次合同勉強会を6月5日から7回開催し、合計98人の隊員とJICA海外協力隊技術顧問が参加しました。

隊次別座談会では「私のwill（やりたいこと）、can（できること）、must（やらなければならないこと）」の3つを全員で共有しあい、技術顧問からアドバイスをもらいました。隊次合同勉強会は「事例から学ぶコミュニティ開発」とし、6人の隊員による事例報告と、活動現場の課題についてグループディスカッションを行いました。

協力隊OBが春の叙勲で「瑞宝双光章」を受章

令和2年度春の叙勲で、武藤一郎（むとういちろう）さん（タンザニア・畜産加工・1969年度3次隊）が、公務などに長年にわたり従事し、成績を挙げた方に授与される「瑞宝双光章（ずいほうそうこうしょう）」を受章しました。武藤さんは、合計11年間タンザニアで隊員活動を続け、帰国後は外務省の職員として活躍。定年後は、愛知県青年海外協力隊を支援する会、一般社団法人アフリカ協会で活動し、国際協力の理解と支援に取り組んでいます。

クロスロード

令和2年7月号［第56巻第6号 通巻658号］
発行日　令和2年7月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

ご意見・ご感想をお聞かせください。

アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 派遣国でつくった日本食レシピをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

クロスロード 2020年7月号

隊員めし おかわり！

日本でつくる現地の「めし」は活力の源

隊員's ポイント！
甘辛いソースに少し漬け込むこと

目指せ！ サモア人の親友の味 マグロの「ポケ」丼

初めて「ポケ」を食べたのは、サモア隊員なら誰もが知っている「シーフード」というお店です。ポケは日本の料理でいう「魚介の漬け」。あまりのおいしさに月1回は店に足を運びました。ときにはテイクアウトし、ココナツボウルにご飯を入れポケ丼にすることも。しかし、サモアで1番おいしいポケは、サモア人の大親友がつくったもの。自分でもつくろうとしましたが、あの味にはなりませんでした。帰国1年後にサモアに帰ったのは、親友のポケを食べるためと言ってもいいくらいです。私のためにたくさんのポケをつくって迎えてくれました。

最近、新型コロナウイルス感染症の影響で、精神的にも体力的にも少し疲れ気味でした。週末にこのポケをつくり、のんびりと過ごした現地での時間や、頑張り過ぎなくていいということを思い出しました。今後も私の専門である歯科や食を通じてサモアとつながり続けたいです。

今月の料理人
織田千恵（おりたちえ）さん
（サモア・歯科衛生士・2016年度1次隊）
●活動内容：国立病院の歯科に配属され、技術指導や公衆衛生活動に携わる。

材料（2人分）

マグロ（刺身用）…150g
しょうゆ…大さじ1
砂糖…小さじ1
みりん…小さじ3
ゴマ油…小さじ1
アボカド…1個
青ネギ…少々
唐辛子…適量
ご飯…適量

※丼にしないときはご飯は不要。
※今回、唐辛子は食べるラー油を使用。
※アボカド、青ネギ、唐辛子はお好みで。

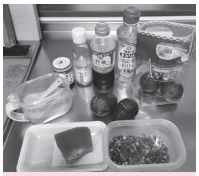
つくり方

❶しょうゆ・砂糖・みりん・ゴマ油・唐辛子を混ぜる。顆粒ダシを加えると和風に。この甘辛いソースが味の決め手！ これまでの経験では、しょうゆ1に対して、砂糖とみりんを合わせたものが1の配合が絶妙です。

❷マグロがサクのときは切って刺身にし、①のソースをかけて和える。少し漬け込むとよりおいしくなる。

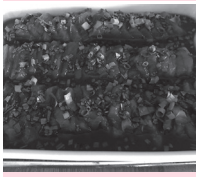
❸刻んだアボカド、青ネギを添える。これで「ポケ」は完成。

❹ご飯にのせるとポケ丼に。



❶材料はどれも日本で入手できるものばかり

❷ソースを和える。刺身は一口大の大きさ



❸親友がつくったポケ。

サモア人の親友。今も食を通じた交流が続いている

今月号の表紙
タンザニア

文=加藤伶奈（かとうれいな）さん
（コミュニティ開発・2017年度3次隊）

学校に行っても、家庭を見ても、「本」があまりない中、地域の図書館を訪れたことをきっかけに始めた読書の環境づくり。写真の小学校では「読書クラブ」を設立していただき、図書館から頂いた本を読んでいます。10人からのスタートでしたが、他の児童も参加を希望するようになり、現在は多くの子どもたちがメンバーとなっています。覗き込むように読む姿は、夢中そのもの。本を読むことで、いろいろな世界や学ぶ楽しさを知ってもらえたらうれしいです。

2020年7月1日発行（毎月1回1日発行）第56巻第6号 通巻658号 編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

JICA ジャイカ